正信偈講話

明治
40 8 4
内交

正信偈講話目次

感謝……清澤滿之……一
緒言……一
本偈（原文、譯文）……一
講話……一
歸敬……一
第一章　今は歡喜の時也……三
第二章　念佛爲本……一七
第三章　信心爲本……三四
第四章　如來の因位及び本願……四九
第五章　如來の果上及び靈能……七四
（上）衆生救濟の緣……七四

(下) 衆生救濟の因……九〇
第六章　大聖釋尊及び『大經』……一〇八
第七章　御名に於ける生活……一二六
(一) 我等直に佛地に在り……一二六
(二) 我等悉く一道に在り……一三八
(三) 我等常に慈光に在り……一五二
(四) 我等永く不退に在り……一六七
(五) 我等は正に世の花也……一八〇
第八章　新生活の門……一九四
第九章　新生活の指導者……二〇七
第十章　南天竺の聖者……二一九
(上) 人格上の指導……二一九
(下) 教義上の指導……二三五
第十一章　アユダ城の論主……二五二
(上) 人格上の指導……二五二

(下) 教義上の指導……二六八
第十二章　遙山寺の和尚……二八六
(上) 人格上の指導……二八六
(下) 教義上の指導……二九七
第十三章　石壁谷の禪師……三一四
(上) 人格上の指導……三一四
(下) 教義上の指導……三二八
第十四章　光明寺の大師……三四四
(上) 人格上の指導……三四四
(下) 教義上の指導……三六四
第十五章　横川の僧都……三七七
(上) 人格上の指導……三七七
(下) 教義上の指導……四〇〇
第十六章　吉水の聖人……四一〇
(上) 人格上の指導……四一〇

(下)救藏上の指導……四四四
第十七章　いざいなむ……四六一
第十八章　讃仰の樂堂……四八〇

以上

感謝

我他力の救濟を念ずるときは、我が世に處するの道開け、我他力の救濟を忘るゝときは、我が世に處するの道閉づ。

我他力の救濟を念ずるときは、我物欲の爲に迷さること少く、我他力の救濟を忘るゝときは、我物欲の爲に迷さるゝこと多し。

我他力の救濟を念ずるときは、我が處する所に光明照し、我他力の救濟を忘るゝときは、我が處する所に黑闇覆ふ。

嗚呼他力救濟の念は、能く我をして迷倒苦悶の娑婆

を脱して、悟達安樂の淨土に入らしむるが如し。我は實に此念により現に救濟されつゝあるを感ず。若し世に他力救濟の教なかりせば、我は終に迷亂と悶絶とを免かれざるべし。然るに今や濁浪滔々の闇黑世裡に在りて、夙に清風掃々の光明界中に遊ぶを得るもの、其大恩高德豈區々たる感謝嘆美の及ぶ所ならんや。

明治三十六年四月一日、宗祖御誕生會

三河大濱町西方寺に於て

清澤先生

緒言

明治三十四年の冬、おふけなくも此偈文の講話に筆をとりそめてより丁度五年の月日を經て漸く今日筆をさしおくことになりました。

かきはじめました折には、清澤先生も、又鼎の父も存命でありました。讀んでもらひ、訂してもいたゞきました。然るに第一の草稿をかきをへましたのは、三十七年の四月一日でありましたが、此折、先生は、もはや此世には在ましなかつた。而して最後の補訂を終へました唯今は、父の面を見ることができませぬ。さま〳〵の感にうたれずに居られませぬ。

此御偈は、鼎が此世において讀みました最初の佛典であります。學校へも出ませぬ幼少の折鼎は之れを教へられました。教へたのは申すまでもなく父であります。かく父は鼎が世の

學者道德者の教に接せぬ前に夙く、私をして宗祖聖人に參らせてくれられました。其後、他郷に遊ぶやうになつてよりも、父は殆ど書信の度毎に御慈悲の御旨を喜ぶやうにとすゝめてくれられました。鼎が清澤先生其他多くの師友の指導にあうて經典を繙き、聖教を窺ひ、細々ながらも大法の一分を味はせていたゞくやうになつたのは其源父の御蔭であります。かくて鼎は父母師友多くの方々の力ぞえによつて、鄙劣不德の身ながら今日まで歩ませていたゞきました。今は先生も此に居たまはぬ、父も母も其かたちを見ることができぬ。而も如來の御淨土は此方々が其處に往きたまひしことによつて、今は一層鼎には近く懐かしく仰がるゝやうになりました。父母師友、誠に常人ではないやうに思はれます。

宗祖御淨土にかへらせられてより茲に六百四十五年、遺訓益々盛にして遙に御在世の昔にこえてをる。鼎不行屆の身を以てこの小講話を世にさゝげて、聖人の大教を明かにする燈の一つにも加へていたゞきたいと念じまするのも、遠くは佛祖宏大の御恩に報ひ、近くは清澤先生の御恩、父母の恩、其外多くの道契の御恩に報ひたいと思ふがためであります。

嗚呼何たる不思議の御みちびきであらうか。唯御稱名より外に御禮のことばを存じません。

明治三十九年十二月十五日午前十一時下總千葉の小巷なる千葉教院の佛室にて、

鼎　謹識

正信念佛偈

親鸞聖人御製

釋鼎謹譯

帰命無量寿如來
南無不可思議光

法藏菩薩因位時
在世自在王佛所
覩見諸佛淨土因
國土人天之善惡
建立無上殊勝願
超發希有大弘誓

大御命かぎりなき御佛に歸し、
その靈しき御光に憑り奉る。

佛もと法藏の御名をもち、
饒王佛の御もとにて、
さはの淨土の御もとゐと、
其よしあしとをみそなはし、
こよなくたかき御ねがひと、
まれの御ちかひたてまして、

五劫思惟之攝受　劫波、いつたび廻るあひだ、おもひえらばせたまひにき。

重誓名聲聞十方　かさねてちかひたまふらく、わが、いま、しめす阿彌陀の名、もし十方に、きこえずば、ゆめ、正覺に、のぼらじと、

普放無量無邊光　普く、無量、無邊の光、
無礙無對光炎王　無礙、無對、炎王の光、
清淨歡喜智慧光　清淨、歡喜、智慧の光、
不斷難思無稱光　不斷、難思、無稱の光、

超日月光照塵刹　超日月の御光を、

一切群生蒙光照　はなちたまひて、なべて世を、てらしたまへば、ありとある、ものみな、めぐみうけまつる、

本願名號正定業　この御ねがひの御名こそは、正しきさだめのちからなれ。
至心信樂願爲因　こをうけしめんの御願ひぞ、まさにすくひのもとゐなる。

成等覺證大涅槃　われらさとりにちかづきて、
必至滅度願成就　つひに涅槃に、うまるゝは、かならずこゝにむかへんの、みちかひすでに成ればなり。

如來所以興出世　唯說彌陀本願海
五濁惡時群生海　應信如來如實言
能發一念喜愛心　不斷煩惱得涅槃
凡聖逆謗齊廻入　如衆水入海一味
攝取心光常照護　已能雖破無明闇
貪愛瞋恚之雲霧　常覆眞實信心天
譬如日光覆雲霧

この御ねがひをとかんとて、釋迦牟尼、此世に出ましぬ。
にごりのうみになやむ子よ、まことのみことうけよかし。
このまこと、一たびうけば、つみのまゝ、涅槃にいらむ、
もゝのみづ、海に入るごと、凡聖みな、めぐみにとけむ。
光、つねに、護りたまへば、雲に似て、つみは覆へど、
まことの日、つゆ障られで、むねの上、闇とはに消ゆ。

雲霧之下明無闇
獲信見敬大慶喜
即横超截五惡趣
一切善惡凡夫人
聞信如來弘誓願
佛言廣大勝解者
是人名芬陀利華
彌陀佛本願念佛
邪見憍慢惡衆生
信樂受持甚以難
難中之難無過斯

このまこと、えて喜こばゝ、惡き道、とくたちこえむ。
おしなべて、こを御佛の、ひとの世の、智慧ある者よ、
ひぢにはふ白き花よと、ほめますぞ、いと畏きや。
されどほとけのみちかひは、よこしま、おごりに蔽はるゝ、
人のうくるは、やすからで、かたきがなかにいとかたし。

印度西天之論家　西のそら、印度の國、

中夏日域之高僧
顯大聖興世正意
明如來本誓應機

東、　支那、　ひのもとに、
このみちの、　われひとに、
ふさへるを、　宣らんため、
みひじりの、　みこゝろの、
こゝなるを、　つげむため、
つぎつぎに、　論家いで、
世々、聖、　あれましぬ。

釋迦如來楞伽山
爲衆告命南天竺
龍樹大士出於世
悉能摧破有無見
宣說大乘無上法
證獄喜地生安樂

釋迦牟尼如來、　御弟子等に、
楞伽の會にて、　宣りたまふ、
のちのよ、　南に龍樹　いで、
まよひをやぶり、　法をとき、
歡喜のくらゐ、　さとりえて、
やすき御國にうまれむと。

顯示難行陸路苦
信樂易行水道樂
憶念彌陀佛本願
自然即時入必定
唯能常稱如來號
應報大悲弘誓恩

天親菩薩造論說
歸命無碍光如來
依修多羅顯眞實
光闡橫超大誓願
廣由本願力回向

この御ことばにこたへつゝ、　いでましぬ。
菩薩龍樹、
かれきくがぢをあゆまざれ、
やすきふなぢにむかふべし、
佛の御ねがひ、念ずれば、
すなはち、心、さだまらむ、
めぐみ、おもひて、常にたゝ、
御名をよべとぞつげたまふ。

天親、　御ふみをときたまひ、
みづから佛にしたがひて、
御名のまことをのべたまひ、
ちかひの旨を、うちひらき、
めぐみによりて、一心の、

爲度群生彰一心　歸入功德大寶海
必獲入大會衆數　得至蓮華藏世界
即證眞如法性身　遊煩惱林現神通
入生死園示應化

みちを世のためあらはして、
功德の海に歸しぬれば、
かならず聖のかずにいらむ、
華のみくにゝいたりなば、
すなはちまことをさとりえて、
まよひのはやし、つみの園、
めぐみしかむとゝきたまふ。

本師曇鸞梁天子　常向鸞處菩薩禮
三藏流支授淨教　焚燒仙經歸樂邦
天親菩薩論註解　報土因果顯誓願

曇鸞、流支にみちびかれ、
仙經、やきて、道にいり、
梁王、菩薩とうやまひて、
つねにみもとををろがみぬ。
天親菩薩のふみをとき、
ちかひに淨土のみちをさし、

往還回向由他力　正定之因唯信心
惑染凡夫信心發　證知生死即涅槃
必至無量光明土　諸有衆生皆普化

ゆくもかへるも御ちからぞ、
すくひのたねは信のみぞ、
つみひと、信をおこしなば、
迷に涅槃の理をさとり、
御くにに生れてありとある、
衆生化せむと宣べたまふ。

道綽決聖道難證　唯明淨土可通入
萬善自力貶勤修　圓滿德號勸專稱

道綽、　つひに、聖道の、
さとりがたきをさしおきて、
ひとり淨土のかどのみぞ、
かよひ得べきとうちさだめ、
自力の諸善を、おとしめて、
御名となへよとすゝめまし、
三信のをしへ、ねむごろに、

三不三信誨慇懃

像末法滅同悲引
一生造惡値弘誓
至安養界證妙果

善導獨明佛正意
矜哀定散與逆惡
光明名號顯因緣
開入本願大智海
行者正受金剛心
慶喜一念相應後
與韋提等獲三忍
即證法性之常樂

道なき世をも、あはれみて、一生、つみにけがれしも、ひとたび誓に、あひぬれば、みくにゝ入りて、たへの法、さとり得んとぞ敎へます。

異見、くさぐさおこれるに、善導、ひとり御ほとけの、みこゝろ明かし、すべて世の、よきとあしきを憐みて、光のえにし、御名のたね、ふたつの御手にみちびかれ、願のうみに、いりぬれば、まさに金剛の信をえむ、

源信廣開一代敎
偏歸安養勸一切

一念、御名にかなふとき、韋提と同じく、よろこびと、さとりと信との三つをえて、さかえつきじと宣りたまふ。

源信、ひろく御ひじりの、御をしへ開き、みづからも、ひとへに淨土にむかひつゝ、あまねく世にもうちすゝめ、あさきおもひにみだれざれ、慢のしろにとゞまらむ、ふかきこゝろをたもたばや、まことのくにゝいたるべし、たゞ御名をよべ、罪びとよ、

專雜執心判淺深
報化二土正辨立

極重惡人唯稱佛

我亦在彼攝取中　煩惱障眼雖不見
大悲無倦常照我

本師源空明佛教　憐愍善惡凡夫人
真宗教證興片州　選擇本願弘惡世
還來生死輪轉家　決以疑情爲所止
速入寂靜無爲樂　必以信心爲能入

弘經大士宗師等　拯濟無邊極濁悪
道俗時衆共同心　唯可信斯高僧說

つみのくもりにみえねども、
みおやはうまずたえまなく、
われをてらすとさとします。

我が師源空、御をしへを、
きはめつ、世をば憐みて、
まことのみちを、この國の、
民の上、たかく宣りまして、
なやみの家に、さまよふは、
たゞ疑の、あればなり、
しづけき無爲のみやこには、
信のみ入ると、のべたまふ、

御經つたふる御ひじり等、
世々につゞきて、人の世の、
はてなきつみにくるしめる、
まよひの子らをよびたまふ。

家をいでたると、家なると、
このよのひとよ、諸ともに、
おなじこゝろにつゝしみて、
たゞこのみこと、信せばや。

正信偈講話

多田鼎著

歸敬

南無阿彌陀佛

あふげ、我は、あまねき光なり。きたれ、我は、とこよの命なり。かならず汝をすくはむと、よびます御名、我にきこゆ。

迷のやみは、よもをおほふ。御光ならで、だれかはらはむ。世は泡、身は露に似たり。御命ならで、いづれによらむ。罪のくるしみ、たえずおそふ。御すくひなくば、とはになやまむ。

こゝに、我、御名をうけ、まさに御手によりたてまつる。なえし身に、力わき、やみしむね、喜に震ふ。

やみは、猶おほへど、そのあなたに御光を望む。世と身と、猶もろ

けれど、そのうちに御命にすがる。　つみは猶くるへども、その底に、
御すくひを知る。
　ながき暗路は、こゝに盡く。　くしきゝはみのえにしかな。　とは
のさかえは、まへにあり。　など御めぐみの、かく大なる。
　あゝ、ねがはくば、この御名を、あまねくよもにつたへばや。　かく
てうきよのおもてより涙のあとを、ぬぐはゞや。
　淨土のみかど、御扉あきぬ。　この世のつとめ、をはりなば、ともに
まうでん、はらからと、みよの聖のあとおひて。
　くしき御光、とはの御命、きはなきめぐみ、いかにたゝへむ。　たゞ
こゝに、御名をよび、罪の子、御まへに、ふしたてまつる。
　南無阿彌陀佛

第一章　今は歡喜の時なり

無明の大夜をあはれみて、
法身の光輪きはもなく、
無礙光佛としめしてぞ、
安養界に影現する。――「淨土和讃」。

一。　救の門は既に開かれてある。　今は歡喜の時であつて、痛哭のときではありませぬ。

二。　唯今より二千四百年の前四月八日中央印度のガンジス河の上流に沿へるカピラヴストゥのルンビニ園において大聖釋尊は此世に降誕あらせられました。　其時光明全世界に輝きて天上の諸神は樂を奏し地上の國民は歌を歌うて、我が世尊の來現を歡びました。　其後星移り物變つて世の情態は殆ど昔のすがたを留めてをらぬ。　然るに

救の道は不變なり

其中に在つて世尊の宣べさせたまへる救の道のみは少しも異らず愈〻常住一如の御光をばかゞやかせられ今や正しく私共の上に來らせられて昔のまゝに如來本願の御旨を明に傳へられてある。老翁アシタは嬰兒の世尊を拜みまつりて、折角其降誕に遇ひ奉りながら自ら年老ひたるが爲めに其御教を受くることができずして、世を去らねばならぬことを悲みました。私共アシタより生まれ遲るゝこと二千餘年。

釋尊の御恩

世尊の降誕を拜ますして而も今世尊の御指導を受くることができる。何たる幸であらうか。カビラヴストゥの民人のやうに私共亦喜び祝はねばなりませぬ。

三、若し釋尊の御教がなかつたならば、私共は果てしなく無明の暗路に迷はねばならなかつたのであります、いつまでも我を知らず、親を知らず、罪を愧ぢず、道を知らず、三界の孤兒として、流轉の旅を重ねばならなかつたのであります。然るに私共釋尊の御教によつて初めて親あることを知り奉り自分が一決して孤兒でないことが分りました。窮なき古より窮なき末にわたつて、とこしへに盡きたまはぬ御壽命をたもたせらるゝ我が大慈悲の御親が、畏多くも此身をたすけむために、久遠のいにしへに眞如一實の御座を起ち安養の淨土をうち立て、御すがたを其上にあらはし量なき御光を此世に放ちて私共を救はむと呼ばせられてある、而して南無阿彌陀佛の御名が實に其招喚の御名であることを知り奉つた。私共は茲に初めて自分の罪を知つた而して又此罪を救はせたまふ大御心を感じさせていたゞいた。今は是れ決して人生の寂寞をかこつべき時ではありません。行末の暗いのに戰くべき時ではありませぬ。又我が弱く汚れてをるのに恐れ悶ゆべき時でもありませぬ。毅然として起つて道に進むべき時である。この大御心に安ずべき時である。この大御心を喜ぶべき時である。されば何事も凡てを知らしめして我を呼びたまふ此御親にまかせまゐらせて此御力にもたれ、此御光に護られ、安らかに我がつとめにいそしみながら、喜び勇んで、我を待ちうけたまふ彼の御淨土に向ふべき身の上とな

涙を拂へ如來我に在り

らねばなりませぬ。

四。 印度なる摩竭陀の王后韋提希は其宮中の囹圄にあつて釋尊の御教を受け、不思議にも空中にあらはれたまへる阿彌陀佛の御影を拜せられて、心中廓然として限なき喜を得られました。この仕合は唯韋提希のみではない、亦私共にも與へられてある。私共は今我上に阿彌陀佛の御影をも釋尊の御相をも拜まぬ。しかし、やはり囹圄と同やうな此人生にあつて、今釋尊の御教により、如來の大御心のすがたを明かに知らせ給へる御名を承はつてをる。私共は之によつて如來を知り奉ることができる。「阿彌陀佛此を去りたまふこと遠からず御慈悲の親の御心が近く近く我が上に來らせられてあるを知りながら、徒に悲と恐とに沈んでをつてはなりませぬ。

我は韋提希なり此處は摩竭陀の宮中なり

「觀經」

五。 固より唯此人生を觀るときには、寂寥の思が潮のやうに私共の胸の底に催し來るを止むることができませぬ。たゞに雲がくづれ、水が流れ去るのみでなく、花が散り露がこぼれ行くのみでなく、人生全體

人生の寂寥

が暫くも轉變の歩をやすめぬ。世に萬年の邦家なく、國に千歳の王侯はない。財産名譽皆我についてをるものゝやうに思うてをるけれども、凡て是れ竟には取去らるゝに定められてをる。父母家族皆自分のものゝやうに心得てをるけれども悉く是れ今にも別れねばならぬかもしれぬ。百年の後を思へ、今日の者が殆んど一人も茲にはをらぬのである。千萬年の末には地球さへ、太陽系全體さへ、どうなつてしまふか知れぬのである。殊に之が自分以外のものばかりでなく、自分が正に其運命をもつてをる。一分又は一秒の後に自分は此世界にをらぬやも圖られぬ。一生の望は多く泡のやうに消え行きて、我身其者さへ、かやうに果敢ないものであることを思うては、今まで花園のやうに感じて來た此人生が實は沙漠のやうであることを認めずにをられませぬ。されど進んで思へば、かやうな人生なればこそ、御慈悲の如來は我が上に來らせたまふのではないか。若し此人生がいつもにぎはしく、此世界が常世の春であるならば、私共は此まゝでよいかもしれぬ。然るに

無常なるがために茲に常住の光あり

春の夢破れやすく、無常の嵐が暫くもやまぬために、如來は其御光をもつて我を照し、御命を以て我に加へ、私共をして、いつまでも死なく滅なく常住の福祉をいたゞくことのできる身の上となしたまふのである。人生の寂寥は私共にとつて堪へられぬ。而も之が爲に我が上に、温かな御慈悲の御光が降らせられてあることを感じては、私共は抑へ得ぬ寂寥の思の中に、又この厚い御恩を喜ばずにはをられませぬ。

人生の暗黑

六、 人生はたゞ寂しいばかりでなく、又思凝の暗黑を以て覆はれてをる。學問は開け智識は進みますけれども、宏大なる宇宙の上より見れば、極めて〳〵僅なことであつて、濱の眞砂の一粒にだも及びませぬ。植物學はいかに進んでも草の青い意旨、花の紅なる理由、其奥底の道理は知ることができぬ。私共の分つたと申すのは、たゞ目前の小世界の表面だけであつて、その下には無限の不思議が隱れてをる。私共は之を究め盡くすことができぬ。啻に此等自然界の智識のみでなく、人事上の分別に至つても、やはり同じやうに不行屆であつて、現在の生活に於いて、いかに定むべきやら、當惑することが甚だ多い。平生、あれは善い、これは惡いと申してをる其事に、何等の理由もないことが頗る少くないのである。殊に最も大切な自分其者については、極めて分つてをらぬ。自分とは抑何であるか、考へやうともせぬのである。驚き入つた次第ではありませぬか。かやうに現在の自分や外界について分らぬ故、過去については猶更分らぬ。自分が、どうして茲に來たか、人生はどうして出來たか、私共は全く覺えてをらぬ。過去についてこの通りである故、未來については猶一層分らぬ。我が人生はどうなるか、殊に自分はどうなるか。死の來ることは思はるゝけれども、さて其後に如何になるのであらうか、全く分らぬ。死後が分らぬのみでなく、死ぬといふ其事がいつ私に來るかを知ることができぬ。一寸先は全く暗である。かく行末も暗く、今迄も暗く、唯今も暗い。一つの大きな黑幕が私共の過ぎ來し方より現在を經、厚く未來に亘つて、私共を覆ひ包んでをる。而して之れを破ることができぬ。是に於いて私共は、どうして

も愚癡の凡夫であることに氣がついて參る。隨つて自分の現在の生活が全く幻のやうであつて何の意味もないやうに感じて參ります。

暗黒なるがために茲に智慧の光あり

けれども私共は之について自暴自棄の思を起してはなりませぬ。そは如來正に、このために御心を加へさせられてある故である。若し私共にして八方上下去來今のことを見とほす程の明かな智慧があるならば、私共は御光を要せぬかもしれぬ。けれども破らうと思うても破り得られぬ無明の暗黒にもがいてをればこそ、如來は我が上に其御光を放ちたまふのである。固より暗黒は喜ばしいものではない而も此暗黒の上に御光が明かに照したまふことを思へば喜ばしいではありませぬか。まして其御光によつて、この暗黒がだん〳〵薄らぎ行くことを思へば、私共は暗の底にをりながら、遠からず來るべき大覺の曉を望むで勇み進むのであります。

人生の罪惡

七、自分の無常であること、自分の愚癡であることと共に、私共の氣づかずにをられぬのは自分の罪惡である。平生は他人の身の上のみを嘲り罵つてをるけれども、一たび內に省みますれば、我ながら自分の淺ましいのにあきれずにをられませぬ。時には多少きよらかで又靜かなやうに思はるゝこともある。けれどもいかに靜かであつても秋の空の如く、間もなくかはつてしまひ、どのやうに清らかであつても、水の上の畫のやうにすぐさま、こはれてしまふ。其上、驛頭の慈善函に一錢を投ずる時、我が胸に人に見せたいとの思が湧き、一文を乞食にあたへてもその挨拶が疎かな時には、俄に取戻したいやうな心の起るを思うては、清かな靜かなやうな心の裏に、既に恐ろしい惡魔のつきそうてをることを感せずにをられませぬ。清かな靜かなやうな時、猶さうである、其他の場合は、實に、はや、申樣がない。貪慾、瞋恚、怨恨、愚癡、一切の煩惱は父母に對しても、妻子に對しても師匠に對しても朋友に對しても相手かまはず猛り狂うて參る。時々之を思うては、あまりの淺ましさに自ら悔むこともないではない、而も之を改むることができぬ。外に賢善精進の相をあらはすことは、愈々巧になつて、內に虛假不實の思を

罪惡あるがために茲に救濟の光あり

抱くことが益々多い。よくも此世ながら無間の獄火に落ち込まずに參つたことゝ不思議に思はれます。而もよく〳〵思へば、不思議ではない。全く佛の御手が私を捕へさせられてあつたのである。私共は少しも知らずにをつたのであるが、遠きいにしへより彼の御心は私共につきそはせられたのである。「攝取とはにぐるものをとらへておきたまふこと」である。かくまで恐ろしい罪惡の私に、かくまで厚い御慈悲を加へたまふことを思うては、私共は、もはやにげまはることはできぬ。この罪惡の泥に汚れながら、彼の御慈悲の御手に縋らずにをられぬ。私共は今は罪に愧ぢ、我よわいに恐れ入りつゝ、此御慈悲によりかゝつて參るのであります。

「御一代聞書」

八。私共今までは、たゞ此世の寂さと、自分の恐かで淺ましいとに悲み恐れてをつた。而も今一たび佛を念ひまつれば、此世寂しければこそ、御光我を慰め、我心暗ければこそ御光我を照し、我胸罪に惱めばこそ御光我を平安に導かせたまふのである。されば私共は、寂寥、恐癡、罪惡に包まれてをるけれども、そのために又御慈悲の御光が私共を包ませられてある。即ち私共は暗と光とにて二重に包まれてをる。而も此暗は下を覆ひ、光は其上を包む。されば私共自分を見れば全く暗のみであるやうに思へども、御光この上を包ませたまふことを思へば、また恐もなく悲もない。まして人生の常なきことが分り、自分の恐癡が恐癡と知れ、罪惡が罪惡と感せられたのは、これ眞實の智慧である。この智慧は我が力ではない、全く如來の御回向である。常に我を覆ひたまふ御光が、既に我が胸の厚い迷ひの壁を貫ぬき、我が罪惡恐癡の心の室を照して、私をして自分の實相が分るやうにさせて下さつたのである。之を思へば御慈悲の御光は、今はたゞ我が上を照したまふのみではない、我が内をも照したまふのである。洪水が堤を打破つて村里に漲るやうに、今は我が胸の堤を決して、我が身の上より我が胸の奥に漲らせたまふのである。内外既に御光に浸さる、今復どうして之を遁るゝ事ができやうか。私共はあまりの光榮に感泣するより外はありませぬ。

二重の包

御光既に我を破りたまふ

世の苦、世の樂

中道の風光

九。 世の中に樂むでをる者と苦むでをる者とがある。前の人は、多くは今にも知れず陷るべき苦を知らずにをるのであつて、火の燃え上がらうとしてをる樓上に醉ひ戯れてをるやうな危い身の上である。後の人は、此苦に氣づきながら、之を切貫くべき道を知らずにをる。それ故たえず恐れ悶えてをる。如來を信ずる者は、此いづれにも迷ひませぬ。あくまで人生のあてにならぬことを知らせていたゞいてをる、それ故前の人の如く危くない。又此人生の苦にあつて、之より救ひ上げたまふ御力によりかゝつてをる。それ故後の人の如く苦まぬ。世も身も心も常に變はりづめでありながら變はらせられぬ大慈悲の光によつて常に安んじてをる。而して此光は常住の光である。永劫盡きたまはぬ。あたりまへならば泡のやうに消ゆるやも知れぬ自分は此光に護られて不滅の生命を得る。此まゝであるならば暗より暗に迷はねばならなかつた私共は、今は此光に導かれて是非とも光より光に向はねばならぬことゝ定められたのである。是に於いて、たゞ

日々の生活即ち一のルンビニ園なりカピラヴァストゥなり

此世に生まれたる道に入るは道にたがはむが也

淨土往生の望が私の胸に萠えて參る。歡喜と精進とが、一層私の上に加はつて來る。今まで分らなかつた自分と人生とについての色々の問題がだん〳〵明かになつて、日々張合よく、世のため人のため、我がつとめにいそしませていたゞくことができる。春風の見舞ふ處には、到る處鳥がうたひ花が匂ひます。御慈悲の光一たび感せらるゝ處には、この沙漠のやうな我が生活の上に、いづくにも稱名の歌が湧き、歡喜の花がほゝゑむ。即ち我日々の生活が釋尊の降誕をむかへたる一つのルンビニ園となり一つのカピラヴァストゥとなるのであります。

一〇。 釋尊は『大經』において、如來の名號を聞いて信心歡喜せよと仰せられました。私共がこの世に生まれたのは、苦むためではなく、罪に溺るるためでもない、たゞ之より救はれて眞實の歡喜に入るためであります。光は地より湧かず、天より降る。この眞實の歡喜の光は人生よりかゞやき出でず、たゞ〳〵三界を勝過したまふ如來の大御心より降りたまふのである。俯げば茲に苦がある。仰げば茲に榮があ

今は歎喜の時なり

る。私共は如來の御名の御旨を承はつて、此御慈悲を仰ぎ共に〳〵向上の道にすゝまねばなりませぬ。眞實の平安と歡喜と精進とは一に此御名の御旨を承はるより生じて參る。大聖釋尊一代の教の中心は正に此南無阿彌陀佛の御名を私共に知らせたまふより外はありませぬ。

佛教の中心

「御文」第五帖

一一。「他力の信心をうるといふも、これしかしながら南無阿彌陀佛の六字のこゝろなり。このゆゑに一切の聖教といふもたゞ南無阿彌陀佛の六字を信せしめむがためなり。」この蓮如上人の御語は私共にたふとい案内をなしたまふものである。私共は此案内により釋尊の御語により、先聖列祖の後を追うて、この御名の御旨を明かに心得るやうに致さねばなりませぬ。

正信念佛偈の名義

念佛の名義

第二章　念佛爲本

『正信念佛偈』

【字義】一。正信念佛偈とは、正しく念佛の御法を信ずる道理を讃めたゝふる偈文といふ意である。二。念佛といふは、佛名を念するといふことである。念ずといふは、宗祖親鸞聖人自ら「尊號眞像銘文」に「尊號を念ず」といふことについて、「念ずといふは、ふかく信ずるなり」と仰せられました。それゆゑ念佛といふは佛名の御旨を信ずる信心のことである。然るに、一たび、この旨を信ずれば、自ら此御名を唱へる。そこで念佛の信心は、稱名となつてあらはるゝ。されば信心稱名、心の上と形の上と、ちがふけれども、共に同一の念佛である。即ち同一の南無阿彌陀佛の御名が、私共の心と口との上にあらはれて下さつたのである故、同一の御名が私共にあらはれたまふ御はたらきの兩面である。この故に宗祖は、「御本書」に「稱名は即ち憶念、憶念は即ち念佛、念佛は則ち是れ南無阿彌陀佛なり」と仰せられました。されば正信念佛

念佛爲本

偽とは、正しく御名の御はたらきを信ずるといふことである。

三。信といふは「人のことばをたのみて、うたがはざるなり」（「唯信鈔」）。「信は、うたがふ心なきなり」（「唯信鈔文意」）。

四。偽といふは、梵語伽陀の略語で、讖歎の辭といふ意である。

【文科】この正信念佛偽の五字は、此偽の具な名である。「尋常真偽銘文」には宗祖、自ら之を略して「正信偽」と申されました。

信の名義

偽の名義

武田耕雲齋の一行

一。「世は、まだ明治の維新とならぬ前、勤王佐幕の論が日本の國々に沸いて居つた頃、水戸の士、武田耕雲齋は大に皇室のために盡さうといふ志で、同志の士を引きつれて、京都に向ひました。其頃地方の諸藩はまだ多く德川幕府の權威に怖れて居つた時分ゆゑ、國々を通るのが容易のことではなかつた。が辛うじて越前まで參りましたのに圖らずも捕へられて、遂に囚圄の中に投ぜられました。

二。「一行の士は無念で堪へられぬ。殊に捕縛の手續が正しくなかつたといふので、わけて口惜しく思うた。或時などは憤慨のあまりに窓から食物を中に差入れた獄吏の腕を引捉へて、慘々な目に遇はせたといふことである。一同の怨と悶とが、どれほどであつたか、察することができます。

人形を衣じたる一少年

三。「然るに此一行の中に、一人の少年があつた。年は十二三歳であつたとか申します。珍いことには、稚いにかゝはらず、他の人々のやうに騷がず、又愚癡もこぼさぬ。獄吏が異しく思うて、よく氣をつけて居つた處、此少年が常に二つの小い人形をもつてをることを見つけました。初めは、たゞの玩具であらうと思うて居つた處、さうでない、其子は、いつも其人形を極めて大切に扱つてをる。朝、床を離れると、之を自分の前にならべ、恭く手をついて、父上、母上、お早うと挨拶をする。食事の時になると又膳の前に之をすゑて、その人形の口に食物をたべさせその後に父上、母上、いたゞきますと辭儀をいたしては、食事を始むる。又夜になると、お休み下さいというて、二つの人形を抱いて、一處に横はる。これが毎日變りませぬ。そこで、さすがの獄吏も此子が平生の謹

人生は固なり

愼の原因が分つて、感涙に咽んだと申すことであります。

四。「私は一道友より、この話を承つて深く有りがたく思ひました。たゞ道德の方より覗ひましても、此少年が兩親を思ふあまりに、獄中にあつて猶兩親への日々の給仕を疎にせない其志の厚いことは、私共殊に不孝の罪を重ねてをる私にとつて、洵に尊い誡であり、又尊い手本であります。が猶進んで宗敎の上より此話を味ふに、此中に極めて大切なる敎が示されてあることが分ります。

五。「古の人は肉體を囹圄であると申しました。その故は此肉體あるがため鄙い肉慾に縛られて、人間の精神が、自由にはたらくことができぬ故であると申されます。之は隨分尤な話である。が猶廣く考へて見れば、たゞ此肉體のみでなく、此人生全體が、一つの囹圄である。それも、たやすく破らるゝ囹圄でない、なか〳〵破りがたい堅固な囹圄であります。

六。「それはなぜであるか、私共の實驗が之を證明してをる。私共は

常に自分の外と內とに於いて、自分の思ふやうにすることのできぬものので取圍まれてをります。天地の運行を左右することができぬとか、四時の移變を自由にすることができぬとかいふやうな大きなことばかりではない。近い處で私共は自分の朋友を思ふやうにすることができぬ。自分の兄弟を思ふやうにすることができぬ。父母妻子を我が考通りにすることができぬ。それのみではない、自分の身を思ふやうにすることができぬ。自分の心を欲するまゝにすることができぬ。外物他人はとにかく、先づ自分だけ、どうぞ善に近きたい、罪を離れたいと思うても、なか〳〵彼に近き此を遠ざかることができぬ。却て益々反對の傾向をあらはして參るやうなことの多いのが、私共の身の上である。さうして此不自由に加ふるに、冷かな生老病死の大法は、一分の容捨もなく、私共を押へつけて參るのである。私共はどうしても之を免るゝことができませぬ。されば赭い衣を着て居る者も、着て居らぬ者も、皆同じやうに死刑の宣告を受けてをる。早晩何等の前觸もなし

に、此刑の執行を受けねばならぬことゝ定まつてをる。かくて私共は身動きのできぬやうに嚴しき鐵鎖の下に縛られて居るのであります。

「不能」の字

七。「されば不能といふ字は、愚者の字引にあるばかりぢやといふナポレオンの放語は私共の經驗の淺い折、感心した所であつたが、少しく世の經驗を積み來つた上に、かくいうたナポレオン自身も、不本意ながらセント、ヘレナの孤島に、はかなく終らねばならなかつたことを見ては、愚者の字引にも、賢者の字引にも、同じやうに不能の字がちやんと出てをることを認めずにはをられませぬ。それ故年若い時、何でも思ふやうになる自由の樂園であると認めて居つた此人生は、實は不自由の牢獄であつた。而して我も人も、どうしても免るゝことのできぬ最後の死刑を受けるべく此囹圄の中に待ちかまへてをるのである。今更こゝに入れられた手續の正否を彼是いうてもだめである。もがいても、この獄の門は破れぬ。飛んでも、この獄の塀は越すことはできぬ。私共はいかに致したらば宜いであらうか。

人形の德

生活上の偶像

八。「武田耕雲齋一行の中の少年の話は、茲に私共に、大切な指圖を示してくれます。彼の少年が、他人は怨み叫び悶え苦む中に居つて、同じやうな苦を受けながら、年少の身を以て、怨ます悶えず、靜に獄中に居ることのできたのは、たゞ親の人形があつたゝめである。この人形によつて、渠は絶えず親を思ふことができた。親を思ふ時、渠の心は囹圄を飛び越え、獄門を打破つて遠く父母の膝下に樂むことができた。されば渠にとつては、人形は心の飛行器である。重圍の中に陷つた孤城の將士が、輕氣球で、城外の味方と通じ合ふやうに、之によつて渠は常に兩親の膝下に馳せ、その慈愛に温められて、冷かな囹圄の苦を忘るゝことができたのである。人生の囹圄に在る私共、また「人形」をもたねばなりませぬ。私共の心をして此人生の囹圄を脱れて高く私共の眞實の御親であらせらるゝ如來の御許に詣らせていたゞくべき飛行器の人形がなければなりませぬ。即ち私共の感覺に觸るゝことのできる如來の御像をもたねばなりませぬ。彼の少年は、年がまだ幼い故肉身の親

佛名即ち我が偶像なり

「修道講話」偶像章

の人形につかへて、いくらかの慰安を得たが、深く痛く人生の困圍の苦に惱んでをる私共が、圓滿の慰安と策勵とを得るには、心靈上の御親の如來の御像でなければなりませぬ。さらば此如來の御像は、どこより得て參れるであらうか。木像、繪像、たふとくないことはない、されども常に之を奉ずることができぬ。さらば私共の常に奉じ得らるゝ如來の御像は何であらうか。御名、南無阿彌陀佛の御名が即ち是である。此御名が私共の奉ずべき最尊の人形、最高の偶像である。」なぜかと申しますれば、此御名の上に、如來の大御力と大御心との全體が示されてある故であります。どうしてそれが分るか。釋尊及び先賢は明かにこれを說き明して下されました。

佛名の本義(一)南無

「觀經疏」「玄義分」

「摩號眞像銘文」

九。 まづ南無といふは、いかなる思召であるか。善導大師は之を歸命と申されました。歸命といふは、命に歸するといふこと、即ちしたがふことである。然るに眞實に順ふ處には、まかす意がある。まかす意の一面には、よりかゝる意があり、又よりたのむ意もある。このよりかかり、よりたのむ意は即ちすがる意である。それ故、親鸞聖人其外日本の先賢は、南無の二字を、したがふとも、たのむとも、すがるとも、まかすとも、色々に譯して示されました。

「御本書」の「行卷」

(二)阿彌陀佛

一〇。 次に阿彌陀の三字につきては、釋尊、印度の舍衞國の祇園精舍で尊者舍利弗に向ひたまうて、

舍利弗、汝の意に於いていかむ。彼佛を何が故に阿彌陀と名けたまつれる。舍利弗。彼佛の光明無量にして、十方の國を照したまふに障礙する所なし。この故に、號して阿彌陀となしたてまつる。又舍利弗、彼佛の壽命及び其人民、無量無邊阿僧祇劫なり。故に阿彌陀と名づけたてまつる。「阿彌陀經」

と仰せられてある。されば、横に十方に亘り、竪に三世を貫きたまふ無量の光明、無量の壽命、即ち是れ阿彌陀の三字の御旨である。然るに此御光と御命とは何のためにあらはれたまへるものであるか。凡ての處、凡ての時に生まれたる私共衆生を悉く攝め取らむとの御慈悲のた

めより外はありませぬ。

一一の光明、遍く十方の世界を照し、念佛の衆生を攝取して捨てたまはず。―「觀經」

佛心とは、大慈悲是なり。無緣の慈を以て、諸々の衆生を攝めたまふ。―〔同〕

「往生禮讃」

御光既に攝取のためであれば、御命亦攝取のためである。されば阿彌陀の三字は、無量の光、無量の命と共に、又攝取不捨の大慈悲を示させられた御名である。次に佛といふは、具には佛陀、覺者と譯して明かに凡ての道を觀自ら眠らず、他を覺ましたまふ御靈能によつて佛と申し上ぐるのである。されば「我は無量の光である、無量の命である、此光と命とを以て、凡ての衆生を、をさめたすけ、すくふ覺者である」。是れ阿彌陀佛の四字の完き御意である。今此佛に順ひ、此佛をたのむ即ち之が南無阿彌陀佛の六字の御旨であります。

「觀經疏」の「玄義分」

「御文」

四字及び六字

一一。されば佛の御名は正に阿彌陀佛の四字である。南無の二字は私共の方についての辭である。然し幼兒が溝に落ちたのを助け上ぐる時、母の方には必ず子に對して「我に憑れ」「我に順へ」の思がある。「我に憑れ」の思は「我救はむ」の志と相離れぬ。この二つは一慈悲の二面である。さればこそ母の手の下るのを見ては、子は之に憑らずにをられませぬ。肉の親の慈悲と同じく、靈の親の慈悲も亦さうである。その絶對救濟の約束の上には、絶對依憑の命令が含まれてある。「たゞ救はむ」の一面は「たゞたのめ」である。私共佛の御慈悲に向ふ時、この思召が強く我が胸を突き來る故自ら幼兒の母にかけよるやうに、御慈悲の御力に打縋るのである。されば我がたのむは、實は佛よりたのましめたまふのである。我が「南無する」は佛の方の「南無せよ」の思召があらはれたのである。それ故南無は、御慈悲による我が心のありさまであるが、其本づく所よりいへば、私共に對しての佛の思召であり、命令である。「歸命」とは本願招喚の勅命なり」とは此いはれである。されば四字と二字と暫くも離れず、私共は阿彌陀佛の御上に佛の私共に對する思召を

「たのめ」と「救はむ」とは一慈悲の二面なり。

我がたのむは佛のたのましめたまふなり。

「御本書」の「行巻」

しらせたまふ南無の二字を見たてまつらずにはをられませぬ。之により具に御慈悲の旨より申せば、南無阿彌陀佛が我が佛の御名である、略して辭の上より申せば、阿彌陀佛が其御名である。其略異るけれども、共に「たのめ、すくはむ」の御旨を示したまふより外はありませぬ。善導大師の說き示させられた如く「汝、一心正念にして直に來れ、我能く汝を護らむ」との御旨が、實に此御名の御意であります。

【觀經疏】の【散善義】

御名は佛心直接の顯現なり

一二、是に於いて私共は、自ら不思議の感にうたるゝのであります。私共は平生多くの名を聞いて居るのであるが、此御名は其中にあつて、特別の御旨をもちたまふのであります。此御名は正しく、我が御光と御命とに於いて限りなき至上の佛の御名であつて、猶其上に佛の宏大なる御慈悲の御旨をこゝに示したまふのであります。一片の人形も、之が我父母の像であるとして見れば、疎にすることはできぬ。朽ちたる木像も、破れたる繪像も、之を刻み之を畫き出した工匠の胸に現はれた如來の御像の顯現したものであれば、之をたふとばねばならぬ。然る

【修道講話】

人生は神聖の本堂なり、我胸は尊嚴の靈龕なり

に此御名は、此世一生の肉の親のではない、永劫に亘つての親の心の御像である。「佛師畫人が其胸に感じた御像を現はしたるものではなくして、實に如來御自身が直に其御自身を現はして下さつた御像である。」即ち御自身に寫させられたる活きた寫眞である。茲に佛の大御心は明らかに現はれさせられてある。其故私共この御名の御旨を知ると、佛の大御心に接するのである。乃ち平安と歡喜と精進とをいたゞくのである。越前の囹圄にをつた少年が、其人形に因て、囹圄の苦を忘れたが如く、私共は摩竭陀の王后韋提希と共に、此最高最尊の偶像を我が胸の中にたもちて、この火宅のやうな人生の囹圄に、自由の靈趣を得て參るのであります。まして火宅とはいへ、苦惱の多い囹圄とはいへ、この至上の本尊たる御名來らせたまふ上は、この人生は、之を奉じてをる神聖の本堂である。我胸は之を安置してをる尊嚴の靈龕である。私共は自ら戰くばかりの穢の身でありながら、此たふとい本尊を奉ずることのできる仕合を喜びながら、この人生に、不平なく、小言なく、嬰兒

聞名、持名、稱名

「大經」「小經」「觀經」

「往生要集」及び「選擇集」

喜ぶべきは不思議の宿緣なり「大經」

「文類聚鈔」

のやうに心安らかに、日々の生活をすゝめねばなりませぬ。

一三。 されば釋尊は摩竭陀の靈鷲山に於いて、尊者阿難等に、この御名の御旨を聞けと仰せられ、祇園精舍に於いて、舍利弗等に、この御名を執り持てと仰せられ、又王舍城の王宮に於いて、阿難や韋提希等に、この御名を稱へよと仰せられました。まことに此御名を受て、之を信じ、之を持ち、之を稱ふる、この念佛の大義こそ、佛の大道の中心であります。源信源空の二祖が、引續いて「往生の業は、念佛を本とす」と唱へられたのは、この故である。念佛爲本の御敎は、時勢や地方の都合で示されたものではない、いつ、どこでも、かはらぬ永久普遍の眞理であります。

一四。 私共、どういふ仕合か、生々世々の初事に、今や斯道に遇ひました。「たとひ世界にみてらん火をも必ず過ぎて、要めて法を聞け」と仰せらるゝのに、私共は、それほどの志なくして此御名に遇ふことができました。袖振り合ふも多生の緣であれば、此不可思議の御緣は、必ずや遠い昔より佛の引立てさせられた御蔭であるに相違はありませぬ。「たま〳〵信心を獲て、遠く宿緣を慶ぶ」。この宿緣を慶び、この御恩を思へば、どうして斯道をたゝへ、又之を人々に傳へずにをられやうか。佛敎は讃歎の宗敎である。「普流の大法である。廣大なる佛敎の文學は、一面、同胞に對する敎導であつて、一面、佛德に對する讃歎である、この二面をもつてをる言語文字は、信心の根より生ずる報恩の莖に開く所の花であります。

佛敎は讃歎の宗敎なり、普流の大法なり

本偈の由來

「御本書」の「信卷」

一五。 今此『正信偈』六十行百二十句の文字、正に是れ親鸞聖人の御胸より、さき出でた花の一片であります。今よりちやうど、六百八十年の前、聖人は常陸稻田の草庵に在らせられた。其頃源空聖人の御苦勞の御蔭が、やうやく世にあらはれて、念佛の敎は廣く四方に傳はつたけれども、外では自性唯心の理談に傾いて淨土の眞證を貶め、內では定散自心の驕慢に蔽はれて金剛の眞心に暗い者が多く、念佛爲本の大義世に明かでないのを歎き、自ら筆を執つて、元仁元年五十二の御歲に『敎行信證』即ち『御本書』六卷をかきをはらせられた。その最初の『敎卷』に「無量壽

偈の地位

『行卷』と『信卷』

本偈は大法の御旨に入るへき一門なり

經』即ち『大經』が釋尊御一代の御教の本經であることを示し、次に『行卷』に移つて、多くの經釋に依つて御名の御德を明しをはちせられた時、聖人は殊に厚く佛の御恩の深遠なるに感じたまうて、初は釋尊の經意により、終は諸祖の釋意によつて、この一篇の偈文をつくり、之を『行卷』の終に加へて『行卷』と『信卷』との鍵になさつた。其思召、全く念佛爲本の道をたゝへて、私共に正しく御名の御旨を信じさせやうといふ御慈悲より外はありませぬ。それ故、偈の名に之を示して『正信念佛偈』と仰せられました。

一六。『御本書』六卷の中心は『行』『信』の二卷である。この二卷の精神が此一偈に含まれてある。それ故、この偈文は、短いけれども『御本書』一部の縮寫圖であつて、隨つて、聖人の御信心の縮寫圖であります。それ故この偈文が分れば、聖人の御信心が分る。聖人の御信心が分れば、念佛爲本の道が分る。斯道が分れば、佛の大御心を明にうかゝふことができます。されば、此偈文は佛の大御心をうかゝふべき眼鏡であります。その一字一句に、御慈悲の御影が映らせられてあります。

本偈の意語

一七。それ故古より聖人の教の流を汲んでをる者は、この偈文を疎に致しませぬ。現に數百萬の同行は、日々一二度之を讀み上ぐることを怠りませぬ。而して世の移り行くと共に、親鸞聖人の精神のだんだん廣く傳へらるゝにつれて、この偈文を重んずる者が益々海の內外に加はつて參る。曉の村夕の巷、あちこちの家々に、老ひたるも、幼きも、共に、佛壇の前に跪いて、之を誦するのを聞きまするとき、私共は此世ならぬ思に打たるゝのであります。

一八。この大切な偈文の御旨を窺ひ盡くすことは、私の及ぶ所ではありませぬ。たゞ佛祖の御引立によつて、その照鑒の下に、私の小やかな胸の上に現はれたまふ此偈文の思召だけを宣べて、同行の人々と共に、少しなりとも多く御慈悲の御旨をうかゝひたいと思ひます。

第三章　信心爲本

歸命無量壽如來　南無不可思議光

【讃方】無量壽如來に歸命し、不可思議光に南無したてまつる。

【字義】一。無量壽とは、阿彌陀の名義の中無量の壽命といふ御旨について、

無量壽の名義

釋した佛名であつて、善導大師が、「觀經疏」の中に、之を示されました。

二。如來とは、如はまこと、まことの御心より、まことの道理によつて、

如來の名義

私共のために、まことに來りあらはれたまふ故、佛を如來と申上ぐるのである。

三。歸命とは、命令に歸順すること、宗祖は「尊號眞像銘文」に「歸命といふは、如來の勅命にしたがひたてまつるなり」と仰せられました。然るに順ふには、惡む意あり、まかす意あり、すがる意がある。故に、歸命を、常にたのむとも釋し、又したがふ、まかす、すがるとも訓ずる。「御本書」には、よりかゝり、よりたのむと訓ぜられました。

歸命の名義

四。不可思議光とは、阿彌陀の名義の中、無盡の光明といふ御旨について釋した佛名であつて、曇鸞和尚が「讃阿彌陀佛偈」の中に之を示されました。

不可思議光の名義

五。南無とは梵語、之を漢語で釋したのが、歸命といふ語であります。

【大意】私は、御命のかぎりない御佛にしたがひ、思ひはかることのできぬ御光の御おやをたのみ奉ります。

【文科】此二句は、歸敬の語であつて、又宗祖御自分の信念を打明けたまふもの、隨つて「正信偈」一篇の精神を總括つて示したまふ御語であります。

南無の名義

一。「無量壽如來に歸命し、不可思議光に南無したてまつる。」親鸞聖人は、將に『正信偈』一篇を宣べやうとなさるゝについて、何の前置の御語もなく、先づ、すぐづけに此唯二句の歸敬の御語を示させられました。蓋し、御名の御旨を感じ來らせられて、御胸の中に沸いて參つた信念が抑ふるに抑へられずして進り出でたのであります。

二。『法華經』の「信解品」に、父に背いて他國にさまようて居つた不孝な息子の話があつて、私共を諭して下されてあります。私共は實に親不孝の息子である。今日まで、肉身の親は存じてをつたけれども、心靈上の親は知らなかつたのであります。五十年、七十年の此世の親は存じ

我は「信解品」に於ける窮子なり

肉身の親　心靈の親

てをつたけれども、永劫の引受をして下さるゝ親は知らなかつたのであります。我一人又は我一家の親あることは存じてをつたけれども、十方の凡ての衆生の唯一の親の在ますことは少しも辨へなかつたのであります。然るに今、南無阿彌陀佛の御名の御旨を承れば、この御名の御佛は主として我が眞實の自己、即ち我が心靈を救うて下さるゝ御方である。たゞ五十年七十年の目前の人生のみではない、我が永遠の行末を引受けて下さるゝ御方である。たゞ私一人のみではない、我一家のみではない、其量なき御命と御光とを以て、いつ、どこにをる者をも又如何なる者をも漏らすことなく攝めとりたまふ御佛である。されば此如來は、正しく是れ我が心靈の親、永劫の親、大千世界の親、十方三世の一切衆生の親であらせらるゝのであります。私共は肉身の親より上に、この大なる御親をもつてをつたのである。而して私共は皆共に正しく此御親の子であつたのである　然るに私共は、これまで全く之を忘れてをつたのであります。

無明、驕慢、惡業、苦痛

無明の生起

三。かくまで親を忘れて居つたのは、何故であるか。私共の心が永く親を離れてをつたゝめである。何故に親を離れてをつたのであるか。驕慢の思が私共の胸にあるためである。何故に驕慢の思があるか。私共が愚かなためであります。凡ての迷凡ての罪、凡ての苦は、皆無明より生じて參る。無明が流轉の因である。而も愚かな私共は、いかにして此無明の迷が自分の上に起つて來たかを覺えてをりませぬ。けれども此迷が我が起したものに相違なく、又いかなる理窟が立つにせよ、眞實の道理に背いたものであることは、現在、眼覺めた我が本心に、之について「すまぬ」といふ慚愧の念のあることで明かである。而も此無明が極めて遠い古に我が上に起つたものであることは、現在、其結果として積み累ねられた我が迷惑が實に厚い上にも厚いので善く分る。私共は此恐るべき無明の迷を自分に起して、久しき以前より、このために覆はれ、驕慢の思に狂はされ、浮いた欲望にも誘はれ、親の在ますことをも知らず、罪惡の魔鄉にさまようて、幾千萬年とも知れぬ長い間、彼方

苦痛の原因

此方に漂うて、つひに今此人生の宿にとまることゝなつたのであります。而も習慣は第二の天性である。迷惑と罪悪との習慣は、我が中心までにも浸み込み、私共は、そのため、日々、浸ましい生活に沈んで少しも御慈悲の親などを思ひ出しませぬ。この恩知らずに幸の來らぬのは當然である。さまゞの苦しみは不孝の報として私共の上に加はつて居る。けれども猶自分の罪を悔ゆるの思ひなく、たゞ人を恨み世を怨んでをる、かくて罪と苦とは、益々烈くなつて、廣い天地に、五尺の身を置きかぬるやうに感ずることが少なくありませぬ。これが私共の唯今の身の上であります。然るに私共は思ひもよらず、茲に南無阿彌陀佛の御名をきく。さうして之が正に我が眞實の御慈悲の親の御名であることをきく。而もそれが唯の御名でない。無限の大悲を此に示して「直に來れ、我能く汝を護らむ」と宣ふ招喚の御名である、殊に世々の聖賢が之を傳へて、私が此人生の宿に來て之を受くるのを待たせられてあつたものであると承つて見れば、いかに恩知らずの私共も、どうして其宏大なる御慈悲を感せずにをられやうか。

御名の成就せられたる道理

四。自分を見れば、葉末の露のやうな危い身分ではないか。我ながら震慄するほどの罪人ではないか。十方世界いづくにも眞實に我が憑るべきものはない身の上ではないか。殊に死の暗、我に迫つて參る時には、今まで親かつた者さへ我に伴はず、我は獨り此宿を出て、行くへも分らぬ暗の中に迷ひ入らねばならぬ身の上ではないか。この私を如來、その御名を以て、をさめ護ちむと呼びたまふのである。どうしてすぐさま之に順ひ奉らずにをられやうか。

五。私共時には、いさゝかながらでも其御光を拜みたい、其御相を仰ぎたい、と思ふ。けれども今思へば、若し私共にして御光を拜み、御相を仰ぐことのできるほどの靈能あるものならば、御名は要らぬかもしれぬ。然るに今は無明の眞夜中にして、私共は御光も御相も拜むことのできぬ心靈上の盲人なればこそ、かく御名を以て私を呼びたまふのであれば、その御相や御光を知ることができねばできぬほど、この御名に走

らずにをられぬ。軍人は君に召さるれば、死を免るゝことの難い戰場にさへ躍り出る。私共は無量の光に生まれ、無量の命を得るために、その御命と御光との如來より招喚をうけてをる。私共、ためらつてをられぬ。ちやうど母に呼ばれた幼兒が、どのやうな玩具も皆うちやつて母にかけ寄るやうに、すぐさま凡ての計ひを打すてゝ、此御名に順ひこの御慈悲にすがらずにをられませぬ。この間に申譯や前置などいたさべき暇はない、申譯や前置は、他人の間のことである、眞實の親子の間のことではない。眞實の信念は、前置のない信念であります。

前置なき信念

六。若し佛の招喚に前置があらせらるゝならば、それに應ずる私にも、また前置をいたさねばならぬ。即ち、たゞ來れと仰せられずして智をみがき德を積み、力を具へて我に來れと宣ふならば、之に向ふ時、私共は、その條件をならべて御たすけを求めねばならぬ。然るに私共内に省る時、この條件はとても整へられぬ、佛は明かに之を知らしめされてある。それ故、たゞ憑め、たゞ救はむと呼びたまふ。「南無」は「たゞたのめ」である。「阿彌陀佛」は、たゞ救ひたまふとの思召である。それ故、之を聞く私共、またたゞたのまずにをられませぬ。裝にむかへば裝が出る。「ありのまゝ」に向へば「ありのまゝ」がでる。これ人の性である。佛はそのやるせなき大悲のために、その親心のありのまゝを打出して「たゞのすくひ」を以て私に向ひたまふ。私共そのために引起されて、子心のありのまゝを打出して「たゞのたのみ」を以て親に向ひ奉る。「唯」と「唯」「ありのまゝ」と「ありのまゝ」、これが親と私との出會であります。茲には此外何の智慧も道德もいりませぬ。

唯信は能はざる如來の御力なれば也

七。けれども私共、たやすく、この唯と唯との旨を會得することができぬ。たゞ御名を信ずるだけでは何となく物足らぬやうに思はれて、他の智慧や道德が、やはり安心と向上とのために、大切なやうに思はるゝ。これはまだ明かに御名の御旨を知らぬのである。衣を被つて寢て居つた幼兒が、夜の明けたのを知らず、眼をさました處、四方暗黑であつて、餘り寂しい故、外へ出やうと思うた。けれども何となく恐い故、枕

元にある棒をとり玩具の短銃を探し出して出かけました。彼是してをる間に、何となく頭の上が温かに感せらるゝ。怪しく思うてをる中に、突然母に何をしてをるかと叱られ、始めて衣を被つてをることに氣ついて、之をとり去つて見れば、日は既に三竿の高きに上つて居つた。私共がこの愚かな小兒のまねをすることが多い。御慈悲の光は、すでに我が上に輝かせられてあるけれども、疑の衣を以て自ら暗くしてをる故、恐のために空手で進むことができぬ。そこで智慧道德甚しきは祈禱加持、いろ〳〵の用意をする。けれども思ふやうに出來ず、又斯途の役に立たぬ。心は頻に悶え苦んでをる時、内に漸く御慈悲の光を感じ、外に善知識の教に警められて驚いて御名の御旨をきけば、何ぞ圖らむ、光は既に我が上を照させられてある。無量の壽命、無量の光明、無限の大悲の大御父は、我が上に臨ませられてある。銀貨を見れば、幼兒は其掌の上の木の葉をすてる。眞晝中に母の前に居つては、棒も短銃もいらぬ。私共は、一切を打置きて、たゞたゞ御慈悲を仰ぐより外はありませぬ。

八。この御慈悲に憑る時、私共は茲に本當の智慧の本眞實の靈德の本をいたゞくのである。幼兒にとつては母の前にをるより力强いことはありませぬ。棒も銃も何一つなくとも、母こそは幼兒のために眞實の護衛者である。今もその如く私共は一切を打捨てゝ、一に御慈悲の御前に立つことを自覺する時、茲に大なる力が私に加はつて參る。私は其光によつて、世の實相や主旨を知る事ができて、今まで幻のやうに思うて居つた此人生は、實は神聖なる淨土へ往生のための門口であることを認め、自分は、御慈悲によつて之に向ひ、之に進む身の上となつてをることを認むる。されば御名の上に、世の學問の名目はない、世の道德の形式もない、然も世の智慧より道德より幾層倍とも量ることのできぬ程、超え勝れたる本當の智慧、眞實の道德が、これに存してをる。それ故、世の凡てを差措いた私共は、如來の御名によつて、それより上の凡てを與へらるゝのであります。「平生のとき、善知識のことばの下に

「執持鈔」

歸命の一念發得せば、そのときを以て、娑婆のをはり、臨終とおもふべし」。日々の生活に、新たな旨が現はれ、新たな力が加はつて、御力に恐るるとき差措いた凡てが、今は報恩のために、いづれも疎にしてはならぬことになつて、現在及び未來の生活が、私の上に尊い光を現はして參ります。されば信心は、向上の本である。凡ての生活の基礎である。「信は道の元だり、功德の母なり」との經文は、いつまでも動かすことのできぬ大切の御語であります。

「歎異抄」

信心と稱名との關係

九。私共一たび之を承はる上は、我が聖人と共に、此御名に順うて、此御名のあらはしたまふ無量壽の御佛に歸し、その不可思議の御光をたのみ奉らずにはをられませぬ。一たび之に歸し、之をたのむ私共は自ら之を稱へずにはをられませぬ。否私共の心に入り滿ちたまへる御名が、自ら隙を窺うてば、私共の唇の上にあらはれたまふのであります。

「御本願」の「信卷」

「眞實の信心には、必ず名號を具ふ」。信心の火には、必ず稱名の烟が伴ふのであります。されど稱名は、差別あり變化ある形の上に現はるゝもの故、その現はれかたは人により時によりて同じやうではない。全く現はれぬことさへ少くはありませぬ。さればとて信心にかはりがあるのではない。烟はかはつても、火はかはりませぬ。稱名は、あらはれても、あらはれなくとも、信心は常に同一であつて、いつでも其中に稱名となつて、現はるべき御德を具へたまふのであります。それは信心は本であつて稱名は末である、末に本は具はらぬけれども、本には末が具はる故であります。

信念と人格

一〇。草の莖の上に花が幾片も開くやうに、一信心の上に稱名の行が現はれ來ると共に、猶我が意の上に、我が身の上に色々の御德が現はれて參る。天親菩薩の宣ふ禮拜讚歎作願觀察回向の五念と仰せらるゝのは、是である。要するに我が人格の上に、信心の御德が現はれさせられて、自分の上に、又他人の上に、たふとき恩惠を注ぎたまふのである。されば完全なる人格とは、この信念の完全に現はれたる身の上をば申すのである。古來の聖賢は即ち是であります。此等の方々は、その完

全な人格を以て、即ち信念の權化として、即ち斯唯一の御名の權化として世に動かせられた故、その德化、永へに現在より未來久しく流れ行くのであります。ヒマラヤ山下の泉は、流域千里に亘るガンヂス河の本である。そは其泉が盡くることのない源より湧き出づる故であります。時には全く煩惱の落葉の底にかくれ、妄念の巖石の間に消え失するかと思はるゝ程の我信念、何ぞ圖らむ、これ全世界に灌頂を行ふべき清淨の靈泉であります。これ此信念が無限の大御心より流れ來る故であります。

自信數人信

一一。それ故我が聖人は先づ自ら無量壽の如來に歸し、不可思議の光をたのんで、而して後に之を他にすゝめたまふた。此偈の最初の一行二句は、即ち聖人自身の信念を打明けさせられたもの、此後の五十九行百十八句は、即ち私共に對して、此信念を勸めさせられたものであります。自ら信するは他を信せしむる道開きである。最も內に深いものは、最も外に廣い。天下の濟度は、自分の濟度より始まるのでありま

す。

一二。嗚呼、御名を信じ受け、御名を稱へあらはす、この念佛の道こそ正に私共の永劫の光榮の湧く處である。而して稱ふるのは信ずるより起り、現はるるのは受くるより來る。此信心の根本と稱名の枝葉とで出來上つてあるのが念佛の大樹であります。私共、煩惱具足の凡夫火宅無常の旅路に永く惱むだ者は、此大樹の蔭に憩ふて、始めて苦をいやすのである。代々の祖師、殊に源信源空の二祖は、相繼いで念佛爲本の敎を唱へて、この大樹の大切なことを論されました。親鸞聖人は、その後を承けて、信心爲本の本義を示して、この大樹を得るの大本を敎へられました。されば聖人の信心爲本の御敎は、二祖の念佛爲本の旨の根蔕を示して、其旨を一層明かになさつたものであります。此御敎によつて、私共は本を知り本を得ることができる。本があれば末は其中に具はり、又其中より生ずる。されば聖人一代の敎化、この信心爲本の本義を離れさせられたことはありませぬ。「聖人一流の御勸化のをも

むきは、信心を以て本とせられ候。」御互に此指示された標的に向つて歩を進めて參りましたならば、決して迂路に迷ふやうな恐はありませぬ。

入信の道―聞名

「御本尊」の「信卷」

一三。さらばこの信に、如何にして進むことができるか。『大經』に其名號を聞いて、信心歡喜せよと仰せられてある。私共は御名の御旨を聞かねばなりませぬ。さらば聞くといふは、どういふことであるか。「たゞおほやうに聞く」のではない。「聞」といふは、衆生佛願の生起本末を聞いて、疑心あることなし、是を聞といふ」と仰せられてある。私共は明かに如來の本願の與らせられた由來を承ばらねばなりませぬ。『正信偈』の第二行以下は、之を示したまふのであります。

第四章　如來の因位及び本願

法藏菩薩因位時　在世自在王佛所、
覩見諸佛淨土因　國土人天之善惡、
建立無上殊勝願　超發希有大弘誓、
五劫思惟之攝受　重誓名聲聞十方。

【讀方】法藏菩薩因位の時世自在王佛のみもとにましまして、諸佛の淨土の因、國土人天の善惡を觀見して、無上殊勝の願を建立し、希有の大弘誓を超發し、五劫に之を思惟し攝受して、重ねて誓ひたまふらく、名聲十方に聞こえしめむと。

【字義】一。法藏とは、佛の因位に在した時の御名である。其大御心は道の大海、德の源泉、一切諸法の藏まつてある處である故法藏といふ御名を示されました。

二。菩薩とは梵語菩提薩埵の略語であつて、菩提は道薩埵は有情或は衆生如來の因位及び本願

といふこと。それ故菩薩とは道を修め道を現はす者といふ意で佛の因位を申します。

因位の名義

三。因位とはたらきのまだ全く現はれぬ位をいふ。

世自在王佛の名義

四。世自在王佛とは、異譯で世饒王佛略して饒王佛とも申し上ぐる。法藏菩薩の前に此世に現はれさせられた佛である。世に於いて饒に自在のはたらきをもちたまふといふ御意で此名があるのであります。

淨土の因の名義

五。淨土の因とは淨土とは清淨の國土といふ意。その國々の成立つてゐる基本を淨土の因といふ。

人天の名義

六。人天とは、人と天といふ意にて、天上天下凡ての衆生をひきくるめて申す語である。

善惡の名義

七。善惡とは、並にては道德上の善惡といふよりは寧ろ勝劣精麤といふほどの意である。

願及び誓

八。無上殊勝の願希有の大弘誓とは、私共罪惡の衆生を必ず救はむ、さなくば我佛にならじとの御願及び御誓は、此上もなく勝れた願であり、又比なき弘い誓ひ、無上殊勝の願希有の大弘誓と申すのである。

劫の名義

九。劫とは梵語劫波の略語で、長時と譯す。天女が三年毎に一度天より下りては其羽衣を以て四十里立方の石を磨つて、それを磨り盡くすほどの長い時を一劫といふと譬へられてある。極めて〳〵長い時間をいふ。

攝受の名義

一〇。攝受とは、惡きをすて〻善きを〻さめるといふので、たらびとるといふ意である。

名聲の義

一一。名聲とは、南無阿彌陀佛の御名である。

十方の義

一二。十方とは、東西南北と四維と上下とである。

【大意】我が大御佛は、遠きいにしへ、法藏菩薩の御名をもちて、世自在王佛の所にあらせられ、諸佛の御國の基と形相と又其國人との勝劣を見たまひ五劫の間思びえらびて私共をたすけんために、たふとき御願をたて、やすき道を開き、飛れて我が名を十方につたへて茲に必ず生まれしめむと誓はせられました。

因緣果の大法

【文科】これより具に如來の御德のかざりなきことをたゝへたまふために、先づ此八句において、如來の因位における御慈悲と又其本願とを示したまふのである。

一。この大なる宇宙は、しだらなく、きまりのないものではありませぬ。嚴かなる一つの大法を以て收縮られてをります。それは即ち

因緣果の大法であります。

二、因緣果の大法とは、どういふものであるか。外ではない。どのやうな事にも物にも、皆因と緣との二つがある、凡ての物事は、この二つによつて出來上つた果であるといふ道理である。さらば因とは何であるか。其物事を顯はすについての主要な作用をする者。緣とは何であるか。因をたすけて其物事を顯はれしむる者。この二つによつて顯はれ出づる事或は物が果であります。今一つの豆について見るに、その種は因である、日光や雨露や土や肥は緣である、それによつて生ずる豆が果であります。いかなる物事も、因なく緣なくして出來たものはない、又因あり緣あつて果のあらはれぬことはない。「因緣果」略して「因果」又は「因緣」の大法は、この大宇宙の全體にゆき亘つてをります。

因緣果の意義

「偶然」の意義

三、私共、折々思ひもよらぬことに會ふ。其時、これは偶然の事であると申して、因緣の道理以外のことのやうに思ひます。けれども之は私共で其道理が分らぬだけであつて、決して道理以外のことではありませぬ。昔の人が偶然といふことは、恐かな者の申すことであるといふたのは、尤な譯であります。

因果法の普遍性

四、それ故、遠きは天上の星宿より、近きは机上の草花まで、此世界に現はれてある者、一つとして因緣果の大法によらぬものはありませぬ。形ある外界より形なき內界まで、この無數の物事は、皆毫末ほども動かぬ此一つの大法で、びしつと取締られてをるのであります。

御名の因緣

五、されば南無阿彌陀佛の御名を以て、私共にあらはれたまふ無限の救濟の力、亦此世にまします上は、必ず此大法によらせられてあるに相違はありませぬ。林檎の落つるのを見てさへ、私共は其因緣を知りたく思ふ。今私共にとつて、救の網たる斯御名に因緣のあらせらるゝ上は、どうしても之を窺はずにはをられませぬ。

大慈顯現の本願

六、これを窺ふ時、私共は直に此無限の救の御力が、無限の御慈悲より出でたものであることを知ることができる。而も慈悲は獨で其眞實のはたらきを現はしたまふものではない、必ず智慧と相合うて現は

れて參ります。されば此御名の示したまふ救の御力は、御慈悲の因が智慧の緣を得て現はれたまへるものに相違ありませぬ。

七。さらば御慈悲其者は、どこより來らせられたか。慈悲の本はやはり慈悲でなければならぬ。其本の慈悲は又其本の慈悲より來らせられたに相違ない。それ故私共は茲に御慈悲の大御心の限りなく遠い大昔より引續き來らせられてあることを感せずにをられませぬ。この無窮の御慈悲は、其本體をいへば常に少しも變のない誠である、故に之を一如といひ、眞如といひ、法性ともいひ、法身とも申します。この法性眞如の上の御慈悲の御力が、無始の昔より續き來つて、今私共の上に來らせらるゝやうになつたのであります。世には此の宇宙に大なる一如の誠が在ることは認むるが、どうしても御慈悲のあることを認むることができぬといふ者があります。これはいまだ誠といふ者の性能を知らぬのである。私共の胸に起る誠は小やかなものである。けれどもそれでさへ孺子の井に落つるのを見れば我を忘れてたすけやうとするではありませぬか。誠は必ずや眞の愛となつて動くものである。この宇宙に在る大いなる誠のみが、どうして慈悲として現はれさせられぬといふことがあらうか。一如の大御誠は、つひに救の御力を以て動き來らせられたのである。而も既に來るといふ來らせられた始がなければならぬ。又來らせらるゝやうになつた譯柄がなければならぬ。その譯柄は何であるか。いふまでもなく唯私共のためであります。親の胸に愛の湧き來るのは子のためである。湧く時始めて愛ができたのではない、湧かぬ前よりも愛は親の胸に溢れてあつた。而かもそれは子よりいへば潛んで居つた。然るに子の憐れむべきを見る時、潛んで居つた慈愛の念は泉のやうに親の誠の胸に湧き起つて參る。今正しく其如く無始のいにしへより法性眞如の御胸に宿りたまへる大慈悲は、私共が忽然として無明の迷によつて罪と苦とに墮ちゆくのを見るに忍びたまはず、唯たゞ之を救はむがために、潛在より顯在に移らせられた。即

報身

ち私共がそれまでは、どうしても感ずることができなかつたのに、それより私共の感じ得らるゝ御身となつて下されたのである。是に於いて絶對一如の天と、相對有限の地との間に、初めて靈交の道が開かれました。即ち如來は絶對無限の御德を具へて相對差別の上に現はれ、極めて高く極めて遠い絶對無限の境を離れずして、極めて低く極めて近く其御慈悲の御手を降させられた。されば私共より申せば、無窮の古より大千世界の本體たる一如の誠の中に潛みたまへる御慈悲の因が、私共の緣によつて私共の上に動き來らせたまふやうになつたのであります。

八、されば我が如來は私共に對して顯現の歷史をもちたまふのであります。潛みたまふも現はれたまふも常に同一大悲の御誠で、少しも其上に變のない方より觀へば全く因果を超えたまうた法身であらせたまひつゝその顯現の歷史を示したまふ上で觀へば全く因緣果の道をとつてその慈悲の御志に報うて現はれさせられた報身である。

報身及び法身

【口傳鈔第十五章】

それ故その御身に因位果上の分位を示したまふのであります。私共はこの顯現の御旨を詳に承らねばなりませぬ。たとへば水と波とは相離れぬ。されど水の中には波と動べきはたらきは潛むで居る。けれども波の中には水の本性が現はれてをる。今それと同じく法報の二身は、共に一佛身の一面である。而も法身としての御旨の中には報身としての御すがたは潛ませられてあるけれども、報身としての御相には法身の本性が現はれさせられてある。即ち報身の全體が法身の中に潛むと俱に、法身の全體が報身の中に現はれさせられてある。されば智見の行屆かぬ私共は、先づ潛みたまふ上に尋ねずして、先づ現はれたまふ上に尋ぬる。先づ法身の道理を望まずして先づ報身の御旨を觀ふ。報身の御旨が私共にとつては、實に大道の中心であります。

九、我が聖人は之によつて『大經』により、此報身の御旨を明にするため、先づ、茲に五十六字の御語を示されました。即ち是れ如來の因位を明したまふ御語であります。

「法華經」の「藥草品」

過去の諸佛

法藏菩薩

「大經」上卷

一〇。三千大千世界を墨にせよ、それと同じほどの墨を以て世界をめぐり、その一滴ほどづゝを一つ一つの國に點じて、それを點じつくせ、かくて其墨の點せられたる國の塵を數へよ、その數は、どのやうにか澤山なことであらう、而も其數ほどの劫よりも猶我壽命は久しくして遠しと仰せらるゝ久遠實成の御佛は、其間幾度も御相を法界の上に現はして、法界の道理を觀じたまうた。『大經』に示されたる五十三佛は即ち之である。而して其次に顯させられたる御相が世自在王佛である。而も迷に沈み罪に苦んでをる私共衆生に對する矜哀の御心は抑へさせたまふことができず、つひに法藏菩薩と現はれさせられた。菩薩は利他の大悲の始めて萌えそむる位である。如來は因果の大法に順つて、先づ此位に現はれ、慈悲の大御心を其御身に示して「國を棄て、王の位を捐て」、凡ての世俗の虛榮を拋ち、全く「世と超異して」衆生の救濟以外どのやうな志をも、もちたまはず、其慈悲の御志を完く果たさんがため、やはり因緣の大法によつて、先佛の智慧を求めて、世自在王佛の前に出で

如來の初願

ゝ、次のやうに其御心を宣べさせられた。

吾誓ひて佛たるを得むに、普く此願を行して、一切の恐懼に、ために大安をなさむ」たとひ佛、百千億萬ありて、無量の大聖、數恒沙の如くならむも、一切の斯等の諸佛を供養せんよりは、道を求めて堅正にして邪かざらんには如かじ。」たとへは恒沙の如き諸佛世界、また不可計の無數の刹土、光明悉く照して此諸國に徧からむ。」是の如く精進にして、威神量り難からむ。」我、佛とならんに、國土第一にして其衆たへに、道場超絶し、國泥洹の如くにして、等雙なからしめむ。」我當に哀愍して、一切を度脫すべし。十方より來生せん者心悅び、淸淨にして、已に我國に到らば、快樂安穩ならむ。」

ねがはくば、佛信明したまへ。これ我が眞證なり。願を彼に發して、欲する所を力めむ。十方の世尊、智慧無礙なり。常に此尊を、我心行を知らしめむ。たとひ身を諸の苦毒の中におくとも、我行は精進にして、忍びて終に悔いざらむ。」「大經」

浄土の選擇

かくて菩薩は、先づ私共衆生を救ひ上げたまふべき國土を打立てたまはむがため、諸の佛の浄土の形相と其成立の基本と、又其人天の妙麗とを廣く示したまふやうにと世自在王佛に求めさせられた。此佛は乃ち其御智慧を此御慈悲の菩薩の大御心の上に打傾けて悉く其見たまふ浄土のありさまを現はさせられた。中に於いて菩薩は麗なるをすてゝ妙なるをとり、劣れるを去り勝れたるを選んで、その尊嚴美妙の御國の成立を定めさせられた。

衆生因の選擇

一一。國土についての御意既に定まつて菩薩は重ねて思惟あらせられた。國土を打立てたまふことは、衆生を導きたまはむがためである。されば御國が、いかに勝れて居ても、衆生が生まれ難くば慈悲の御意にたがふ。然るに此往生の道を定むるに、一切の行皆たやすくない。「若し夫れ遺像起塔を以て本願となさば則ち貧窮困乏の類、定めて往生の望を絶たむ。然るに富貴の者は少く、貧賤の者は甚だ多し。若し智慧高才を以て本願となさば、愚鈍下智の者、定めて往生の望を絶たむ。

「選擇集」

然るに智慧の者は少く、愚癡の者は甚だ多し。若し多聞多見を以て本願となさば少聞少見の輩、定めて往生の望を絶たむ。然るに多聞の者は少く少聞の者は甚だ多し。若し持戒持律を以て本願となさば、破戒無戒の人、定めて往生の望を絶たむ。然るに持戒の者は少く破戒の者は甚だ多し。」孝養父母を其道と定むれば、不孝の者は生まれず、讀誦大乘を其因とすれば、文字のない者は往くことができぬ。慈悲清浄の人のみを許さば、慳貪不浄の輩は漏れ、忍辱精進の者のみを迎へなば、瞋恚懈怠の類は捨てらるゝ。かくて竟に往生の光榮を得る者がいか程かあらう。多くの者は、皆共に再び果てなき暗路に迷ひ入らねばならぬ。菩薩は之を慮らせられて「一切の善惡の凡夫、ひとしくうまれ、ともにねがはしめむがために、つひにたゞ御名を信受する一道のみを以て之を迎へとらうと定めさせられた。

光明及び壽命の二德

一二。御國と御國に昇べき道とについての御意こゝに定まると共に菩薩は御自身の御命と御光とが限りなからむことを望ませられた。

その故は、淨土の建立と衆生の救濟とは、御命と御光とが限りなく宏大であつて、始めて完く果さるべき御事である故であります。

四十八願及び三願

一三、是に於いて菩薩は、世自在王佛の前に在つて、其御慈悲の本願を宣べさせられた。『大經』によれば其數四十八、之を廣く開けば無量の御願であるけれども、狹く收むれば、御自身の靈能と淨土の建立と衆生の救濟とより外はありませぬ。御自身の靈能については、正に次の如く誓はせられた。是が即ち第十二、第十三の御願である。

如來の靈能についての誓願

設し、我佛たるを得むに、光明能く限量ありて、下百千億那由他の諸佛の國を照さざるに至らば、正覺を取らじ。

設し、我佛たるを得むに壽命能く限量ありて、下百千億那由他の劫に至らば、正覺を取らじ。――「大經」

淨土についての誓願

若し佛の御位に在るとも、光明と壽命とに限があるやうならば、我は其位に上るまいとの御誓である。次に淨土の建立、隨つて其中に生まれた者の受くべき福祉については、殊に詳に願はせられて、我國には三惡道あらせまい、我民は三惡道に更らすまい、我民の色は平等に美はしく、あらせたい、天眼天耳宿命他心神足の神通を得させたい、心貪らず智慧明に壽命限なく樂淸らかに心柔く德圓かなるやうに致させたいと畏くも種々の御願を立てさせられて、而も一一の御願について、若し此願成らずば、決して正覺の位に上るまいと誓はせられた。

御名についての誓願

一四、かく種々の御願を立てさせられたのも、たゞ中心の御願たる衆生の救濟を完く果したまふためより外はありませぬ。之がために菩薩は、先づ其佛に成らせたまふ時、衆生救濟の御旨をあらはしたまふ阿彌陀佛の御名が、諸佛によつて普く世に傳へらるゝやうにと望まされた。第十七願は、即ち是である。

衆生の生因についての三願

設し、我佛たるを得むに、十方世界の無量の諸佛、悉く咨嗟して我名を稱せずは、正覺を取らじ。――「大經」

而も衆生の根性は、一つでない。この御名をきいて御淨土を望むけれども、御名の御旨を知らず、唯自分の力のみで進まうとする者、又半ば、此

第十九及び第二十の願

御名の御力を知つて、之をたのみながら、猶自分のはからひを雜へて、通まうとする者あることを察したまうて、此二類の者のためにも、救の門を開かせられた。第十九と第二十との御願は是である。

設し、我佛たるを得むに、十方の衆生、菩提心を發し、諸の功德を修め、至心に發願して、我國に生まれむと欲はむに、壽終はらむ時に臨みて、もし大衆と圍繞して其人の前に現はれずば、正覺を取らじ。

設し我佛たるを得むに、十方の衆生、我が名號を聞き念を我國にかけて、諸の德本を植え、至心に回向して我國に生まれむと欲はんに果遂せずば、正覺を取らじ。　——「大經」

前は全く自力の計度ある者のため、後は半ば自力の計度を雜ふる者のための御願である。けれども是れ其御本意ではない。何となれば雜毒は清淨の因ではない、凡夫自力の毒を雜へては、眞實清淨の樂を享ることはできぬ故である。清淨の果は清淨の因によつてのみ得られ、眞實の國は眞實の道によつてのみ入ることができる。それ故菩薩は、

第十八の王本願

彼等に一分の向上を許させられたが、其御本意に於いては、衆生に御名の示したまふ御力を信じさせ、その御力のみによつて其御國に入らしめやうと願はせられたのであります。第十八願は正に是であります。

設し我佛たるを得むに、十方の衆生、至心に信樂して、我國に生まれむと欲うて乃至十念せむ。若し生まれずば、正覺を取らじ。

——「大經」

是が即ち其御本意の本願であります。光明壽命の本願も淨土建立の本願も皆衆生救濟の本願に收まる。其衆生救濟の本願は、ただ此第十八願に歸する。それ故、この本願は正しく「王本願」であつて、他の一切の本願は、皆之に屬せらるゝのであります。

「選擇集」

第十二の願

一五。但し此本願によつて、私共、一たび御國に生まれても、若し無上圓滿の佛位が得られなかつたならば、御慈悲の御本意は達せられたものではない。それ故、又次の如く誓はせられた。

設し、我佛たるを得むに、國中の人天、定聚に住し、必ず滅度に至ら

希有の誓願

すば、正覺を取らじ。――「大經」

御國に生まるゝ者は、凡て同じやうに、無上涅槃の妙覺に入らせずばおくまい、さなくば我は正覺に上らじとの御誓であります。

一六。 嗚呼、何たる宏大の御願であらうか。世に自分をして富ませたい貴からしめたいといふ願はある。我家を盛にし、我國を強くしたいといふ願はある。然るに今は御自身を忘れて、唯「十方の衆生」と呼びかけ、之を救うて至上圓滿の身の上にさせやうと願ひたまふのである。かゝる本願が、外に何處にあらうか。「十方の衆生」といふ御言の中には、男子も、女子も、小兒も、老人も含まれてある。賢人のみではない、愚者も入れられてある。貴族のみではない、平民も包まれてある。善人のみではない、惡人も含まれてある。龍樹、天親、源空、親鸞の方々のみではない、私共亦正に其仲間である。而して此凡ての者に向つて、少しもむつかしい業因を強ひたまはぬ。學べよ、究めよとも宣はず、修めよ、祈れよとも宣はず、たゞ御名を聞け、たゞ御慈悲を信じて、我國に生まれむと思へ

僧純の好人

如來の誓願

と宣ふ。其上、このためには御自身の正覺を賭物にして、若し此願成らず、衆生救はれずば、我は正覺の位に上らじと誓はせられた。地は廣い、されども此御慈悲の廣いのに、たとへることはできませぬ。天は大である、されども此御慈悲の大なるに比ぶることはできませぬ。實に此御慈悲は、大千世界を包み去つて猶餘がある。古人の申した如く、たとひ此乾坤のほかに足を下すだけの地はあるとも、身を此御恩の外に安することはできませぬ。私共、何の語を以てこの宏大を表はさうか」無上殊勝の願を建立し、希有の大弘誓を超發したまへり」と仰せられたのは、偶然でありませぬ。

一七。 されど菩薩の篤い御慈悲は、之で足れりとなしたまはぬ。廣く四十八願を誓はせられた末、猶一層御願の成就を完くし、私共の信歸を固くするために、また重ねて、

我超世の願を建てゝ必ず無上道に至らむ。斯願滿足せずば誓ひて正覺を成せじ。

我無量劫に於いて、大施主となりて、普く諸の貧窮を濟はずば、誓ひて正覺を成せじ。

我、佛道を成ずるに至らば、名聲十方に超えむ。究竟して聞こゆる所なくば、誓ひて正覺を成せじ。――「大經」

と誓はせられた。是れ實に御本願の精髄である。第一は成道の重誓、第二は救濟の重誓、第三は御名の普く傳はらむことについての重誓である。此中、第二が御願の中心であつて、第一はそのための準備、第三は、それを遂げたまふ方法である。御名十方に傳はらずは、衆生いつ迄も苦に漂ふに相違ない。それ故菩薩は御名の十方に超えたまふことを御願の終極となされたのである。今日「如來の尊號甚だ分明に、十方の世界に普く流行す」る譯は、一に此厚い大御心のためより外はありませぬ。

「五合法事讃」

一八。かやうな大願これ決して少しばかりの思惟の結果ではありませぬ。實に五劫の時を、このために過ごさせられた。けれども唯の願は、成就の本ではない、願に行が伴はなければなりませぬ。それ故菩薩は、此五劫の思惟によつて誓願を定め、次に永劫の修行を重ねさせられた。『大經』には其御苦勞をつたへて、釋尊は次の如く仰せられてある。

五劫の思惟、永劫の修行

一向に志を專にして、妙土を莊嚴したまふ。修めたまふ所の佛國廣大にして超勝獨妙なり。建立常然にして、無衰無變なり。不可思議兆載永劫に於いて菩薩の無量の德行を積植し、欲覺瞋覺害覺を生せず、欲想瞋想害想を起さず、色聲香味觸法に着せず、忍力成就して衆苦を計らず、少欲知足にして染恚癡なく、三昧常寂にして智慧無礙なり。虛僞諂曲の心あることなく、和顏愛語意に先ちて承問す。勇猛精進にして志願倦むことなく、專ら清白の法を求めて、以て群生を惠利す。三寶を恭敬し、師長に奉事し、大莊嚴を以て衆行を具足し、諸の衆生をして功德成就せしむ。空無相無願の法に住して、作なく、起なく、法は化の如しと觀ず。麤言の自ら害し彼を害し、彼と此と俱に害するを遠離し、善語の自ら利し、人を利し、人

と我と兼ね利するを修習す。國を棄て、王を捨て、財色を絶去し、自ら六波羅蜜を行じ、人を教へて行せしめ、無央數劫に、功を積み、德を累ね、其生處に隨ひ、意の欲する所に在りて、無量の寶藏自然に發應し、無數の衆生を教化安立して、無上正眞の道に住せしめたまふ。

思惟修行の原因

【御本書】「信の卷」及び「文類聚鈔」

一九。 實に私共、十方の衆生穢惡汚染であつて、眞實の心がない。それ故今や如來の身口意三業の修めたまふ所、一念一刹那も清淨眞實の心であらせられぬことなく、この清淨の眞心を以て私共にあたへたまふのである。私共具縛の群萌、穢濁の凡愚、清淨の信心なく、眞實の信心がない。それ故、今や三業の修めたまふ所、一念一刹那も疑蓋を雜へたまふことなく、この眞實の信樂を以て私共に降したまふのである。私共、流轉の凡夫、漂沒の衆生、清淨の欲生心なく、眞實の向上心がない。それ故今や三業の修めたまふ所、一念一刹那も回向を首として大悲の心を成就し、この清淨眞實の欲生心を以て私共に振向けたまふのである。それのみならず、私共の積まねばならぬ凡ての德を、私共に代つて積みたまひ、私共の修めねばならぬ凡ての善を、私共に代はつて修めたまひ、竟に救濟の靈能を完く具へさせたまうて、其御旨を御名に顯はし、此罪惡の私共を、此まゝ救はむと呼ばせたまふのである。日露戰爭の後、平和克復の四字が世に現はるゝやうになつたについては、いかに澤山の人の勞苦が費されたであらうか。此四字は、實に、上、天皇を始め四千五百萬の國民の二年間の心配の塊である。澤山の軍人の骨の塊である。此四字の中には多くの戰死者の血が流れてをるのである。南無阿彌陀佛の御名、亦實にさうである。是れ即ち五劫の御思惟、永劫の御修行の凝結したものである。如來のやるせなき大御心の塊である。久遠の古より私共のために動き來らせられた無限の大悲は、今此御名の上に集められて正しく私共の上に來らせられたのである。母の乳房は母の誠の流れ出づる所である。その乳は母の一切の德分の精粹である。如來の大御心の全體の德分は、この御名の乳房より流れ出つるのであります。

御名は無限大悲の凝結せるものなり

「歎異鈔」

二〇。伏して茲に此神聖なる如來顯現の歴史、實に歴史以上の歴史たる此御旨を窺へば、私共、いかに澁とき根性の者も、自ら此宏大の御恩を感せずにをられませぬ。絶對無限の大御心は、私共のためばかりに永劫の時間に亘つて量なき願行を積ませられて今や此に此御名を示させられてある。「五劫思惟の願をよく〳〵案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。」この大なる歴史は、一に私のためである。圓錐の頂點は小いというて疎にすることはできぬ。それは正に大なる基礎の積み累なつた結果である。御名は大御心の圓錐の頂點である。その底には無限の大御心が基となつてをる。この大御心を基として、小い私の心を突きたまふ尖が、即ち此御名である。それ故、一歩、御名の御旨に入ること深ければ、一歩廣く如來の御心を感じ、百歩深く進めば、百歩大きく如來の御心を味ふ。限ある小い我胸と限なく大いなる御心とは實に此御名によつて結びつけらるゝのである。是に於いて始めて有限の苦界より私共は無限の樂土に向ふのである。内心の平安永久の希望抑へやうとしても抑ふることはできませぬ。

第五章　如來の果上及び靈能

（上）　衆生救濟の緣

普放無量無邊光、無礙無對光炎王、
清淨歡喜智慧光、不斷難思無稱光、
超日月光照塵刹、一切群生蒙光照。

【訳方】普く無量無邊光無礙無對光炎王清淨歡喜智慧光不斷難思無稱光超日月光を放ちて、塵刹を照したまふ。一切の群生光照を蒙る。

【字義】一。塵刹とは、塵のやうに數多き國といふことである。刹とは刹摩といふ梵語を略したので國土の義である。

二。群生又は衆生、多くの生死を經て來た者との義で、此世の生類のことである。新譯では有情というてある。

【大意】佛は普く、量ることのできぬ、かぎることのできぬ、さへることのできぬ、くらべものゝない、すべての光の最上なる、清らかで歡喜と智慧とを具ふる、いつもたえぬ、思ひ盡くすことのできぬ、ときつくすことのできぬ、日月の光よりも超えすぐれたまふ尊い御光を放つて、この多くの罪の世を照して下さる故此世の生きとし生ける者、皆この光の御てらしを蒙ります。

【文科】佛因位より果上に遷りたまひて、正しく衆生を救ひたまふに當つて先づ御光を以て、私共を育てたまふことを宣べたまふ一節である。

一。一國の君主は、其國の最上位に在りながら、其國を治めむために、憲法を定め、自身も亦其憲法によつて、凡ての行動を致して參ります。大千世界の主であらせらるゝ如來も、亦その通りであらせらるゝ。御自身は高く一切の法則を超え凡ての制限を超えたまふけれども、此世界の萬象を統ぶるため、因緣果の大法を定め、御自身亦この大法によつて現れたまひ、この大法によつて其一切の大用を示したまふのであります。

二。されば先づ低く菩薩の位に現はれて、私共のために、其思惟と修行とを重ねさせられた、源が清くあれば其流も清く、源が深くあれば、其流れも長い。無限の御慈悲の潛める源より顯はれ來る御はたらき

如來と因果法

宏大の因に應ずる宏大の果

に限のある理がない。永劫の間に於ける御身と御語と御意との作したまふ所限りなく積み累ねられて、終に其本願が完く實現せらるゝことゝならせられた。「譬へば大海を一人升量せむに、劫數を經歷すとも、尙底を窮めて其妙寶を得べきが如く人心を至し精進にして道を求めて止まざることあらば、會ず當に剋果すべし、何の願か得ざらむ」此御語が正しく其驗を現はしたまふことゝなつた。即ち潛ませられた無限の大悲が全く現はれたまふことゝなつた。是に於いて菩薩は遂に因位より果上の佛位に上らせられました。

「大經」

淨土の建立

三。御國は何處に、又如何やうに打立てられましたか。御經に仰せられてある。

法藏菩薩今已に成佛して、現に西方に在ます。此を去ること十萬億刹なり。其佛の世界を名づけて、安樂と曰ふ　――「大經」

又此國のありさまを宣べて、

其佛の國土は自然の七寶、金、銀、瑠璃、珊瑚、琥珀、硨磲、碼碯合成して地を成せり。恢廓曠蕩にして限極すべからず。悉く相雜廁して轉た相入間せり。光赫赫にして、微妙奇麗に、清淨の莊嚴十方に超踰せり。――「大經」

西方の意義

と仰せられ、東西南北、四維上下十方の國土より、雲の如き無數の菩薩が、如來の御德をたゝへむがため、相率ゐて其御許に詣でらるゝことを示させられてある。此に西方と仰せらるゝは、どういふ御意であるか。

私共の見る處、日も西に向ひ、月も西に向ひ、星も西に向ふ。則ち是れ光ある者の歸向する處隨つて眞實の世界の中心を示したまふ思召である。されば、こそ東方よりのみではない、西よりも、南よりも、北よりも、上よりも、下よりも諸の聖者が十方より之に向ひたまふのである。而して日が暮れて暗が此世を鎖す時西の方には茜なす光が輝いてをる。西へ西へと行く時、光は常に其處にたえぬ。人生の夕が來つて暗は我が世を包むとも、佛の御國には、常に微妙奇麗の光が溢れて其清淨の莊嚴は十方に超えたまふのである。其美さは、應多き此世とは限なく隔

十萬億土の意義

つてをる。其尊さは、罪多き此國とは限なく離れてをる。それ故、此を去ること十萬億刹であると仰せられてある。如來は正に此大千界の中心に、その尊嚴の淨土を打立てたまうたのである。而も之が御自身のためではない、一に私共のためである。「其諸の衆生は功德善力を以て行業の地に住す」。御國の民は、皆佛の靈德を受け、其御力によつて、其

「大經」上卷

大行の大地に往むでをる。斯「安樂淨土は、此大悲より生ず」。洵に是れ

「淨土論註」

「其慈悲正觀に由つて生ずる所如來の神力本願の建てたまふ所」淨土の根は實に如來の大悲であつて、一切の莊嚴は全く唯一の如來の清淨願心の顯現より外はない。因既に淨かである、果の淨かなのは決して偶然ではありませぬ。

無量壽の實現

四。御國既に打立てられた。御自身の上には、いかやうに其御德を示させられたか。溺者を救ふ人は自ら求めざるに、先づ岸上の人となる。薪を燒かうとするマッチは薪より先に燃えずにはをられぬ。「智慧の火を以て一切衆生の煩惱の草木を燒かん」となされて、「一衆生だも佛に成らぬことあらば我も佛に成らじ」と誓はせられた我が大御親は一切の衆生を救ひ上げたまふこと確に成らせられた故今や其志を實現せむため、つひに本願の靈德を現はして佛の御身を示させられた。

「觀音授記經」

「大經」に仰せられてある。

無量壽佛の壽命長久にして稱るべからず。汝等ぞ知らむや。たとひ十方世界の無量の衆生皆人身を得て悉く聲聞緣覺を成就せしめ都て共に集會して思を禪かにし心を一にし其智力を竭くして、百千萬劫に於いて悉く共に推算して其壽命長遠の數を計るとも窮盡してその限極を知ること能はず。

まだ完全の智慧を得ぬ者は佛のかくれさせたまふを見、その御命に限あることを思ふ。けれども佛御自身は、實に無量の衆生が數へやうと思ふとも、數へ盡くされぬ御命をたもたせたまふのである。天地ある間衆生ある間否天地なく衆生なくとも、如來の御命は長へに存らへさせたまふのである。「如來の長壽は諸の壽の中に於いて、最上最勝なり」。

「涅槃經」

たとへば阿耨達池が四大河を出だすが如く、如來も亦爾り、一切の命を「出だしたまふ」。實に此御命こそは凡ての命の元、凡ての力の泉であります。

無量光の實現

五、如來は三世に亘つて此後如何なる時に生まれた者をも、救はむために、無量の壽命を現はさせられたと共に、又十方に亘つて、凡ての處に在る者を救はむがために、無量の光明を現はさせられた。『大經』に仰せられてある。

無量壽佛の威神光明は、最尊第一にして諸佛の光明の及ぶ能はざる所なり。

是故に、無量壽佛を、無量光佛、無邊光佛、無礙光佛、無對光佛、炎王光佛、清淨光佛、歡喜光佛、智慧光佛、不斷光佛、難思光佛、無稱光佛、超日月光佛と號けたてまつる。それ衆生ありて斯光に遇ふ者は三垢消滅して身意柔軟に、歡喜踊躍して善心生ず。若し三塗勤苦の處に在りて、此光明を見たてまつれば、皆休息するを得て、復た苦惱なく壽終はりて後皆解脫を蒙らむ。

我無量壽佛の光明威神の巍々として殊妙なるを說かんに、晝夜一劫すとも、尙未だ盡くすこと能はじ。

十二光

釋尊の金口を以て、猶說き盡くしたまふことができぬ。此御光の御德を釋尊でない者の說き盡くすことは、猶更できぬ。されども其萬一を私共に窺はせやうと思召されて、我聖人は、今此偈に、御經に示されたる十二の御名を擧げさせられた。此は各御光の御德についての御名である。必ずしも別々の御光があるのではない。それ故此十二の御名を窺ふ時私共は些ながらも其御德を想ひ奉ることができます。

無量光の名義

六、無量。なぜ御光をかく申上ぐるのであるか。『和讃』に仰せられてある。

智慧の光明はかりなし。　有量の諸相ことごとく、
光曉かぶらぬものはなし。　眞實明に歸命せよ。

如來の智慧の御光は明に三世を照して、長く久しく、如何なる者にも及

びたまはぬことはない。一切の制限、一切の分量を超えたまうて、而もその中に世の凡ての量ある者を被ひたまふのである。どのやうな數も其量を表はすことができぬ。それ故無量と名づけ奉る。私共は、この眞實の御光を仰がねばなりませぬ。

無邊光の名義

七、無邊。 なぜ御光をかく申上ぐるのであるか。『和讃』に仰せられてある。

解脫の光輪きはもなし。
有無なはなるとのべたまふ。平等覺に歸命せよ。

光觸がふるものはみな、

如來の慈悲の御光は厚く十方を包んで廣く遠く、どのやうな者にも降りたまはぬことはない。世界は限がない。一つの太陽系を越えて又一つの太陽系があり、一つの星界の外に又一つの星界がある。天文學はいかに進んでも、この廣さを測ることはできぬ。然るに如來の御光は之を包みたまうて際限がない。大千世界の彼のはてより此はてに輝きたまふのである。凡ての衆生の心一たびこの御光に觸れたならば、皆平等に有無の邪見を離れて、その惱を解脫する。それ故無邊と名づけ奉る。私共は、この平等の御心に歸せねばなりませぬ。

無礙光の名義

八、無礙。 といふはどういふ旨であるか。『和讃』に仰せられてある。

光雲無礙如虛空。
一切の有礙にさはりなし。
光澤かぶらぬものぞなき。
難思議を歸命せよ。

如來の御光は、雲の如く三世十方に滿ちたまひ、宛も虛空が何物をも貫き何物にも行き亘るやうに、山河大地等、物の障にもさへられず、貪瞋癡慢等心の障にもさへられず、一切の者に其恩澤をかぶらしめたまふのである。それ故、金殿の奥にも入り、鐵窓の中にも通ひたまふ。源空聖人の教を經ては、盜賊耳四郎の胸にも入り、親鸞聖人の御語を通しては、惡人辨圓の心にも輝きたまふ。内外物心、凡ての礙有る者に、礙をうけたまはず、自在に其御力をはたらかせたまふ。それ故無礙と申上ぐる。私共は此思ひ議り難い御力をたのまねばなりませぬ。

無對光の名義

九、 かく無量であり、無邊であり、無礙であらせらる、何物か之に對べ

らるべきものがあらう。

清淨光明ならびなし。　遇斯光のゆゑなれば、
一切の業繫ものぞこりぬ。　畢竟依を歸命せよ。

既に對ぶべきものがない。則ち絶對であらせらる。絶對の者は、最強の者である。どのやうな罪業の繫縛も、このために除かれぬものはない。まことに此御光こそ究竟の依憑である。私共は此畢竟の依處なる御光にたよらねばなりませぬ。

炎王光の名義

一〇。 かく絶對であり最強であらせらるゝ故、正しく是れ凡ての光の王であります。

光炎王佛となづけたり。
大應供を歸命せよ。

佛光照耀最第一。
三塗の黑闇ひらくなり。

諸佛の光皆すぐれぬことはない。然も斯佛の御光に及ぶものはありませぬ。「諸佛の光明の中の極明なり。光明の中の極好なり。光明の中の極雄傑なり。光明の中の快善なり。諸佛の中の王なり。光明の中の極尊なり。光明の中の最明無極なり。」地獄、餓鬼、畜生、此三塗の闇はいかに厚くとも、此光炎の王にひらかれぬものはない。まことに是れ一切の供養と恭敬とに相應したまふ御光である。私共は此大應供たる御光を敬はねばなりませぬ。

清淨光の名義

一一。 さて此威神の御光を感ずる時、私共の胸亦自ら其清らかな御德に滿たさる。また何を爭ひ、何を貪らう。貪慾の罪業の垢は、我知らず洗ひ去らるゝのである。御光に清淨の御德がなくて、どうしてかやうなことがあらう。

道光明朗超絶せり。
清淨光佛とまふすなり。

ひとたび光照かふるもの、業垢をのぞき解脫をう。

歡喜光の名義

又此御光に遇へば、私共の心自ら其溫かな御慈悲に和げられ、瞋恚の燄は、やうやく靜に、暴だつ心は自ら慰められるゝのである。御光に歡喜の御德がなくて、どうして、かやうなことがあらう。

悲光はるかにかふらしめ、　ひかりのいたるところには、

法喜をうとそのべたまふ。　大安慰を歸命せよ。

又此御光を受くれば、私共の心自ら明に開けて愚痴の暗がだんだん薄らいで參る。　御光に智慧の御德がなくて、どうしてかやうなことがあらう。

智慧光の名義

無明の闇を破するゆへ、　智慧光佛となつけたり。
一切諸佛三乘衆、　ともに歎譽したまへり。

春の光の到る處には必ず花がさく。　佛の御光の及ぶ處には、必ず清淨、歡喜、智慧の花が匂ふ。　私共は、この私共を清らかにし、私共を慰めて一切の如來と聖者とのたゝへたまふ御德を受けねばなりませぬ。

不斷光の名義

一二。　これらの御力と御德とは、決して唯今ばかりではない長へに續きたまふのである。

光明てらしてたえざれば、　不斷光佛となつけたり。
聞光力のゆゑなれば、　心不斷にて往生す。

御光が常にたえたまはぬ故、その御旨をきいて、その御力に安ずる心も亦絶ゆることはない。　かく變はりやすい我心の中に、變はらぬ信念を懷いて、私共は佛の御國に參るのである。　不斷の御光の御德私共は謝すべき語を存じませぬ。

雜思光の名義

一三。　この御光の御德かやうに宏大である。　私共の小やかな心では、とても充分に思ひ量ることはできぬ。

佛光測量なきゆへに、　雜思光佛となつけたり。
諸佛は往生歎じつゝ、　彌陀の功德を稱ぜしむ。

無稱光の名義

又私共の行屆かぬ語では、とても充分に說きあらはすことはできぬ。

神光の離相をとかざれば、　無稱光佛となつけたり。
因光成佛のひかりなば、　諸佛の歎する所なり。

超日月光の名義

一四。　星は花のやうに輝いてをる。　けれども我地球にとつては、月の光には及びませぬ。　月は霜のやうにさえわたつてをる、けれども日の光には及びませぬ。　日は仰ぎ見ることのできぬ程烈しく輝いてをる。　けれども其光は晝に限られて、夜は照さぬ。　隙なき處には及んで

障ある處には及ばぬ。エッキス光線ラヂウムの光も心のやみを晴らすことはできぬ。如來の御光は晝も夜も如何なる物にも心にも妨げられず、御心のまゝに三世十方を照したまふのである。

超日月光となつけたり。
無等等を歸命せよ。
光明日月に勝過して、
釋迦嘆じてなほつきず。

久遠の光照

私共はこの等しきものゝない御光の御力にすがらねばなりませぬ。

一五。 如來は、今や私共のために、光赫焜耀の淨土を打立て、清淨の莊嚴を以て、之をかざらせられた。而して太陽が草木の花を開かしむる前には、その春の光を以て、之を溫め、之を發ふやうに、如來は私共に信心の花を開かせて其淨土に於いて成道の大果を結ばしむるために、今や其無量の御命をもつて、普く此靈德靈能を具へたまふ無量無邊無礙無對炎王清淨歡喜智慧不斷難思無稱超日月の御光を放つて、正に私共の上に照臨したまふのである。それも今日や昨日よりのことではない。『大經』に宣ふ「阿彌陀佛成佛已來今に十劫なり」と。十劫といふ永遠の古より、この照臨と引導とをつゞけさせたまふのである。否、その十劫の正覺は、五劫の思惟と永劫の修行との結果である。又その思惟と修行とは、無始のいにしへより其御胸に懷かせられた御慈悲のあらはれた結果であれば、實に限知られぬ久遠より、其御心を煩はしたまうて、今や此光を以て私共の上に來らせられたのである。疑ふ者は之を知ることができぬ。けれども一切の群生は皆此遍照の御光に照らされてあるのである。されば無明の長夜は、既に十劫の昔に明け離れたのである。暗黑の惡魔を追ひ退くる曉の鐘は、既に響き渡つたのである。如來の御光は天地の隅々にまで漲つてをる。然るに猶疑の戸を閉ぢて而も暗のたやすく拂ひ除けられぬことを悲んでをるのは餘りに愚かの極ではありませぬか。

夜は既に明けぬ

一六。 起つて戸を開けよ。光は洪水のやうに汚い暗黑の室に流れ込む。我が小い分別や計度の戸を除けて唯御慈悲を仰げ。御光直に私共の心の室に漲らせたまふのである。

一七。暗は光に勝つことはできぬ。春の光には、霜や雪は、皆負けねばなりませぬ。如來、今我上に在ます。私共の行末には、希望の春の光が、待ちかまへてをります。

（下）衆生救濟の因

本願名號正定業。至心信樂願爲因。
成等覺證大涅槃。必至滅度願成就。

【讀方】本願の名號は正定の業なり。至心信樂の願を因となす。等覺を成じ大涅槃を證することは、必至滅度の願成就したまへばなり。

本願の名號の字義

【字義】一。本願の名號とは、如來の本願によつて現はれ、如來の本願によつて傳へられ、如來の本願の御旨を示す名號といふ意である。

正定業の字義

二。正定の業とは、正しく私共を淨土に生まるゝ身と定めたまふはたらきといふことである。業とは結果を引起す原因になるべきはたらきを申すのである。

至心信樂の願の字義

三。至心信樂の願とは、四十八願中の第十八願であつて、此願は至心信樂の因を以て、十方の衆生を淨土に生まれしめむとの御願である故にこの願をば至心信樂の願と申すのである。

因の字義

四。因とは、往生成佛の因といふことである。「尊號眞像銘文」に「至心信樂願爲因といふは、彌陀如來回向の眞實信心を、阿耨菩提の因とすべしとなり」と仰せられてある。阿耨菩提とは無上正覺の梵語の略語であります。

等覺の字義

五。等覺とは、覺は一切の迷より覺めて、凡ての道を覺るといふことであつて、佛の位を示す語。菩薩は、佛の位に近づき、佛と等しき位ゆへ、茲にては菩薩を等覺と申します。

涅槃の字義

六。涅槃とは梵語。譯して滅度といふ。滅度とは、迷の惑が永く滅して、罪の流をば渡りをはつた境界といふ意で、佛の境界を申します。

必至滅度の願の字義

七。必至滅度の願とは、四十八願中の第十三願であつて、此願は、私共を必ず滅度に至らせたいとの御願である故、これを必至滅度の願と申上ぐるのである。

【大意】佛の因位の本願より來りあらはれ、其本願の旨を示したまふ南無阿彌陀佛の御名は私共を正しく御國に生まるゝ身の上と定めて下さるゝ大本の

はたらきである。それを至心にて信じ受けさせやうといふ御願があればこそ
それを信じ受くることができて、その因によりて、私共は御國に生まるゝの
である。この因を得て、此世には菩薩の位に入り、後の世には、大涅槃の位
を得ることは、亦我力ではない、全く佛の力において、必ず私共を滅度の涅
槃に至らしめたいといふ御願が、成就せられてある故である。

【文科】　御光の緣に育てられた上本願の御力によりて愈々御名の御旨を信じ
て、私共は正しく往生の身の上と定まることを示したまふ一節である。

佛身佛土救濟は一慈悲の三面なり

一。救濟の事業には之を行ひたまふ佛身と之を完うすべき國土と
が調はねばならぬ。佛身佛土救濟の三つは、一つの御慈悲の三面であ
ると申すべきである。それ故、この中の一つを知る者は、同時に他の二
つをも認めねばなりませぬ。救濟を信じて、佛身佛土の實在を疑ふと
か、佛身佛土の實在を信じて救濟を疑ふとか、いふやうなことは、あるべ
き筈でありませぬ。

二。因緣果の大法を以て、大千世界を統べたまひ、御自身も亦此大法
によつて現はれさせられ、此大法によつて、低き位より高き位に上り、潛

救濟の準備—光明の靈能

める御慈悲の其まゝを完く示して、佛身佛土の顯現を圖に成就したま
へる我如來は、その本願の中心たる衆生の救濟についても、同じく整然
とした順序を取りたまうて、決して亂れさせたまはぬ。花を開かする
には種を下さねばならぬ。種を下すには、畑をとゝのへねばならぬ。
如來は因位の本願に於いて、唯御名を受くる信心の一つを以て私共を
救はうと誓はせられた。されど御名の種を蒔いて、信心の花を得さす
るためには先づ私共の心田をとゝのへねばならぬ。之を盛らせられ
て、如來は其無量の壽命と、共に成就なされた無量の御光を以て、私共一
切の群生を照し、一方には私共の心田に繁り合へる雜草を枯らし、一方
には私共の心田を溫めて、順緣により逆緣により、たえず私共が信心を
いたゞくための準備をなしたまふのであります。されば私共が日々
出あふ所の色々の事緣を、まぢめに味ふときは、此中に皆たふとい指導
が示されてある。成功も失敗も皆私への如來の諭示である、安樂も
艱難も、共に私に下したまふ引立である。「如來の境界は邊際なし。一

【華嚴經】

念法界に悉く充滿し」一の塵中に道場を立て、悉く菩提を證して神變を起す」。一つ一つの塵にさへ其御光を行き亘らせたまうて私共を導たまふのである。「歸舟明日毘陵路回首姑蘇是白雲」。如來の大悲の願海に浮んで過ぎ來しかたを顧れば皆慈悲の白雲に包まれてをる。過去がさうであれば現在もさうであり、未來もさうである。御光は常に世に充ちてをる。指導はいつも私を離れぬ。此世は嚴かなる大道の講堂であります。

信心の智慧

三、此光明の講堂に育てられて、私共の心は、いかやうに進むのであるか。申すまでもない明かな智慧を得るやうになる。佛の御慈悲には御智慧が加はらせられてある。慈悲の光の一面は智慧の光である。私共、この御光を蒙つて見れば、やはり其智慧を受けずにをられませぬ。さらば其智慧はどのやうな智慧であるか。人生と自分との實相を知る智慧である、人生の危く脆いものであること、自分の小く弱く惡で汚れてをること、此實相を明に覺る智慧である。古の學者は、私は本當に何も知つてをらぬといふことを知つてをる、これが多くの人と異つた處であると、申されたが、此自分の無智、罪惡、微弱、怯劣を感ずる智慧、これが御光の御育てによつて得らるゝ智慧である。此智慧によつて自分を知り、人生を知るとき私共は始めて今まで鐵橋のやうに丈夫に思つて居つた自分の立場が、實は朽ちたる薄い板橋であつて、而も下には激い流が荒れ狂うてをる、今まで花園のやうに思うて居つた此世は實は火宅であつて、自分は今にどうなるやらも分らぬことを感じて、茲に本當に恐れ悶えずに居られぬ。

一佛智と二種深信

此時、南無阿彌陀佛の御名を聞き此御名の上に無量の御命と御光との御父が、たのめ救はむとの御招喚を聞く。一面自分と人生との弱くして汚れてをることを知らせた智慧は、一面この強くして清らかな御名の御旨を信じさせずにはおきませぬ。されば光は他のものを知らしむると共に又己れをも知らしむ。一つの御光の與へさせられた一つの佛智は我を知らしめたまふと共に又佛御自身をも知らしめたまふ。「自身は現に是れ罪惡生死の凡夫、曠劫よ

【觀經疏】の「散善義」

り已來常に沒し常に流轉して出離の緣あることなき」を深く信せしめらるゝと共に、又「阿彌陀佛の四十八願衆生を攝め受けたまへば、疑なく慮なく彼の願力に乘じて定めて往生を得る」ことを深く信せしめらる。一佛智、この二種の深信をあたへらるゝ。是に於いて私共は全く自分をすてゝ、ひとへに御慈悲に歸せずにをられませぬ。

信心の相狀

四。その歸する相は如何やうであるか。御たすけをたのむより外はありませぬ。如來は、たのめ、たすけむと呼びたまふ。之を聞く私共は、この御たすけをたのまずにをられぬ。即ち南無せよ我は阿彌陀佛であるとの御名の御旨を承はる時私共は、この阿彌陀佛に南無したてまつらずにをられませぬ。それ故招喚の御聲たる如來の御名は、如來より私共に向ひたまふ南無阿彌陀佛である。之を受くる私共の信心は私共より如來に向ひ奉る南無阿彌陀佛である。上より下に向ひ、下より上に向ふの別はあるけれども、共に一つの南無阿彌陀佛であることは、ちがひませぬ。されば今までは唯高く如來の御名であつた六字は今は低く我信心の名である。親の御心のあらはれたさへる御名は子の信心を示すものとならせられた。即ち父と子とは此御名に於いて一つとなつて、もう決して離るゝことはできませぬ。機法一體とは此狀態を申さるゝのであります。

機法一體

三信と一心

五。さて猶進んで、此信心の性質を深く究むるに、私共はその一信心の上に至心信樂欲生の三つの旨を感ずることができる。即ち此御すくひをたのむ念は決して偽や飾の心ではない、至誠の心ゆゑ、この信心の本質は至心である。さて此至心は如來のおほせに順うて、疑なく其御すくひをたのむ心となつて現はれ、その中には自ら歡喜愛樂の念が具はつてをる。それ故信樂が此信心の相狀である。然るに斯く御力をたのみ又之を喜び愛づることゝなれば、御國を望み又之に進む所の希望の念は抑ふることができぬ。それ故欲生の心は自ら信心の作用として、之に伴つてをる。かく一信心の體相用として、至心信樂欲生の三信は其上に具はつてをる故、一信心は、そのまゝ三信、三信はそのまゝ

一信心三信と一信心と全く同一體であります。

六。 然るに此三信は決して私共の心でつくり出したものではありませぬ。其本は全く如來の本願に在る。即ち如來が其本願に於いて私共をして是非とも至心に御名を信樂して其御國に生まれむと欲はしめやうと願はせられたればこそ、其御念力に動かされて私共の心に此三信が現はれたのである。誠の前には敵がない。如來至心を以て我に向ひたまふ故、虛假雜毒の我心もそのために打破られて如來の至心を享け奉つたのである。私は私でさへ疑つてをるのに、如來は此私を信じたまうて見すてたまはず必ず私をして御名を信樂せしめやうと其慈悲の御光を以て養はせたまふ故、いかに疑惑雜亂の我心も、そのために貫かれて信樂の念をいたゞいたのである。如來は私共の退き易く摧け易い身の上を憐むで、その窮ない命をいたゞくべき尊い淨土を示し必ず茲に生まれむと欲へと招がせたまふ故、いかに退墮向下の私共も、その御國に生まれやうと思はずにをられぬ。されば私共の至心は本と如來の至心である。私共の信樂は如來が私共を信じて其御光を仰かしめたまうた結果である。私共の欲生は如來が欲生の御聲を以て其御命を望ましめたまうた結果である。光の見ゆるのは光の御かげである。私共の三信は全く如來の三信の現れて下さつたものである。されば實に是れ如來の御誠及び其靈能の御光と御命とが我心に映らせられた影像である。されば月影に向ふ露には月の光がかゞやいてをるやうに、此南無の一信心に阿彌陀佛の總體が降らせられてある。畏多けれど南無阿彌陀佛の全分が今は我がものである。我はたふとくも「南無阿彌陀佛の主」になつたのであります。

我が三信は如來の三信の流るゝ所なり

七。 是に於いて私共は我が胸の上の信心を輕んじてはなりませぬ。洵に是れ生々世々の初事にいたゞいた所のものであつて實に是れ久遠劫來の御慈悲の塊である。自分は此御名の持主となつた。御名は我心の內に入らせられた。されば斯御名は此に又外に現はれたまふのである。稱名は即ち是である。稱名は御名を受けてをる者に裝は

「御一代聞書」

御名と信行

れたる神聖の勳章であります。

八。 御名かく私共の上に降り、私共かく此御名をいたゞきますれば、私共の前途は、もはや暗より暗に迷ふべきものではない、我に今は不滅の燈がある。「道を燈とし、道を家とし、自ら之に依りて他に依ること勿れ」。自分は名によらず、位によらず、金錢によらず、權勢によらず、又智識によらず、道德によらず、唯此御名の燈によつて、光より光に進む身の上と正しく定められたのである。御名こそは實に私共を正定の身となしたまふ大本であります。

御名と正定業

「小乘涅槃經」

九。 御名即ち正定の業であれば、その現れたる信心も稱名も亦正定の業といふことができる。故に多くの先覺は、或は信心につき或は稱名につき、又は兩方について、正定業の名を用ゐてをられます。何れに用ゐるとも、皆是れ本と御名が正定の業である故である。私共は唯此御名をうくることに心がけさへすれば宜いのであります。

信行と正定業

一〇。 私共この御名のたねを受けて、信心の花麗はしく、我胸に開く時私共はもはや今までの生死の凡夫ではありませぬ。「內裏にも蓑着て入るや菖蒲賣」。無位無官の賤の男がきたない蓑を着たまゝ內裏に入ることのできるのは、唯一二本の菖蒲の花をもつてをるためである。罪惡の蓑は今までのやうに我身を蔽うてをるけれども、唯信心の花一本をもつために、私共は、淨土の御門に入り、其處なる聖者の中に列なることができるのである。まして此花は、我が手造りではない、我が知らぬ間に、如來、我に來らせたまひ、我畑をならして親ら下したまうた其種より、開き匂うたものである。一本の菊さへ、我が育てたものが麗はしく開き出でた時は、極めて嬉しい。「いかばかり御手間かゝりし、菊の花」。私共、この信心の花を捧げて御親の前に進み、永劫以來の御苦勞を謝したてまつる時、あなたは、どのやうに喜びたまふことであらう。如來喜びたまへば、我も喜ぶ。喜の波は、彼方より此方に、春の水のやうに、ゆるやかに行き通ふのである。佛凡全く一つである。私は正しく攝取の御光に懷き取られたのであります。

佛凡一體

大覺の可能

「願名鈔」

一一。上には攝取の御光に照らされ、下には稱名の大行に養はれ、此信心の花は愈々さき匂うて、其中に具へてをる無上の至德を開き現はして參ります。此時私共は、此至德を受けてをる身の上としてもはや菩薩である。妙覺の佛位に等い等覺の身の上である。自分には普賢の慈悲あるに非ず、文殊の智慧あるにあらねど、此慈悲智慧と同體の信心を受けてをるがために、正しく普賢文殊の諸聖者と肩を並べて、幾もなく患の火を滅し、罪の流を渡つて、諸法の道理を證り如來と同體なる圓滿の涅槃に進むことのできる身の上である。花によつて結ばるゝ實は花を開かしめた種と同じいものである。信心によつて結ばるゝ私共の佛果は、此信心をあたへたまうた如來の御位と變りませぬ。かくて私共は正しく如來に歸り、其御光に合ひ其御命に入ることができる。「壽命は一切の根元なれば、諸佛も彌陀の智慧より流出し、衆生もまた、かの壽命より出でゝかへりてみな如來の壽命に流入す」。私共は此「壽命の大海」にあつて、共に長へに窮なき至高の福祉を受くるのである

兩重の因緣―光明名號

而も亦是が私共自身の力ではない。鐵の引き寄せらるゝのは、鐵の力ではない、磁石の力である。私共が如來の涅槃に入るのは、私共の力でない、如來の御力である。實に如來が其本願において「國中の人天、定聚に住し、必ず滅度に至らずば正覺を取らじ」と誓はせられた御念力のためより外はありませぬ。

一二。是に於いて私共は、振反つて、救の道の御旨の宏大なることを仰がずにをられませぬ。畑が善く整へられて、そこで種が下さるゝ。則ち芽が出で花がさく。この花は又日光や肥土のために養はれて實を結ぶ。それと同じく如來は御光を以て我心を和げ、我心を進めて其上に御名を下したまふ。此御光の緣と御名の因とによつて信心の果が現はるゝ。此信心はまた之を誘らせたまふ御光や之を引き立てたまふ稱名の緣によつて、つひに涅槃の果を結ぶ因となる。「良に知りぬ、德號の慈父ましまさずば、能生の因かけなむ。光明の悲母ましまさずば所生の緣そむきなむ、能所の因緣和合すべしと雖も、信心の業識に

「御本書」の「行卷」「執持鈔」

あらずば、光明の土に到ることなし。眞實信の業識、これを則ち內因となす。光明名の父母則ち外緣となす。內外因緣和合して報土の眞身を得證す」。同一の御誡より現れたまへる御光と御名とは、茲に兩重の因緣を示し、終に私共を無窮の命の御國に引き寄せたまふのである。

「往生禮讃」

「光明名號を以て十方を攝化したまふ」。網はいかに廣くとも經緯の二線より外はない、十方攝化の大悲の網は、いかに大きくあつても光明の緯線と、御名の經線とより外はありませぬ。

行信證皆他力の回向なり

一三。されば種も花も實も一として我が力で出來たものはありませぬ。大慈悲の大行をなしたまふ正定業の御名の來らせたまうたのは、願はくば此御名を成就し、諸佛をして之をたゝべしめ之を十方に普く及ばしめやうと願はせられた結果である。この御名を受くる私共の大信は、正に至心信樂の願の結果である。この信心によつて私共いたゞく大證は、亦正に必至滅度の願より出來上がつたものである。大行も大信も大證も皆御慈悲のはたらきである。其上照護したまふ御光も、引入したまふ御命も、亦皆御慈悲の顯現である。始も中も終も皆御本願の現はれさせられたものである。私共の向上は凡て本願の活動である、私共の成道の歷史は其一々の文字が皆本願の筆によつて書かれたる慈悲の文字である。本願によつて本願の御名を得、本願によつて本願の證を開く。本願の力は我が全體を掴みたまふ。眞實の自己は全く他力の掌中に在るのであります。

清澤先生の「絕對他力の大道」

大道は皆一御名の顯現なり

一四。然るに本願は色々に分れてあるけれども、其體南無阿彌陀佛より外はない。大行の御名は南無阿彌陀佛である、大信の御旨は南無阿彌陀佛である。大證の果位は南無阿彌陀佛である。それ故本願の全體即ち南無阿彌陀佛である。而して此本願の主であらせらるゝ如來實に南無阿彌陀佛であらせらるゝ。如來、南無阿彌陀佛の御誡により、南無阿彌陀佛の本願を立て、南無阿彌陀佛の御名を以て私共を呼ばせたまふ故私共亦南無阿彌陀佛の御心をうけ南無阿彌陀佛の御名を稱へ此御心と御名とをもつて、南無阿彌陀佛の御膝下に參り南無阿

彌陀佛と同體の大覺を得、南無阿彌陀佛と同體の大悲を行ふの光榮を得るのであります。火はその觸るゝものを凡て自分と同じものにする。如來の御名は實に火である。如來此火を以て私を燒きたまふ故、私も亦此火にもゆる。如來此御名を以て私を呼びたまふ故私も此御名を以て如來を呼びまつる。同一の御名を以て親と子と十方の同胞とが相互に呼び合ふのが、如來の大道に於ける生活である。嗚呼。「正覺の大音響十方に流る」。私共は此鄙しと思うた人生の上に、尊嚴の靈氣の漲りたまふを感ぜずにをられませぬ。如來の御名によつて靈化せられたる人生は、幻でもなく零でもなく、又たゞの囲囲でもなく、眞如一寶の大塊であります。

「大經」

御名と四法

一五。 この眞如一寶の大塊の中に、眞如一寶の大悲より、如來の本願の御旨が開かれさせられた。即ち大行、大信、大證の三法として私共の上に現はれさせられた。此道理を今日の私共に明に傳へさせたまふのが即ち大聖釋尊の大敎である。釋尊の御敎殊に其「大經」の御敎があつて、行信證の三法を私共に知らしめたまふ。若し之が無かつたならば私共はいつまでも暗に迷はねばならぬ。敎行信證の四法は共に一御名の現はれたものであつて私共の救濟の成立つ四本柱であります。

一六。 本佛安養の淨土に影現して、行信證の三法を定めさせられ釋尊カピラヴストウの都に應現して其御敎を以て、之を私共に示させられた。私共は本佛の大悲を恭しく謝すると共に釋尊の御出世を亦ありがたく謝し奉らねばなりませぬ。

第六章　大聖釋尊及び『大經』

如來所以興出世、唯說彌陀本願海。
五濁惡時群生海、應信如來如實言。

【讀方】如來、世に興出したまふ所以は、唯彌陀の本願海を說かむとなり。五濁惡時の群生海、應に如來の如實の言を信ずべし。

【字義】一。五濁とは(一)劫濁、今の時は、病氣や戰爭や種々の災の濁が、時世の上に溢れてゐる、これを劫濁といふ。(二)衆生濁、衆生道を畏れず、德を修めず、父母に孝ならず、師長を敬はず、種々の濁が衆生の身の上について、なる、これを衆生濁といふ。(三)見濁色々の邪見が唱へられて、衆生の思想が濁つてゐる。(四)煩惱濁、慳貪、虛誑色々の煩惱が暴れ狂うて、衆生の心を惱ますことが盛である。(五)命濁かく惡業が盛になつて、正に背き邪に歸し、横に怨を結び、互に世を汚す故、人に中夭の者が多い。かく命の上の不完全なるところを命濁と申すのである。

【大意】過去、久しき以前より、諸佛が番々に此世に出でさせられ、殊に二

五濁の名義

一佛光の顯現—應身

『華嚴經』

千四百年の前、釋尊が、此世に來らせられたのは、唯本佛彌陀の、深くして廣いこと海のやうなる本願の御旨を說かむためである。五濁の惡時において、其數海の如くに量なく、其苦海のやうに遙なき諸々の人々は、應に此如來の如實の御言を信ぜねばなりませぬ。

【文科】前に本佛の因果を宣べ其救濟の因緣を明にせられた故、之より諸佛、殊に釋尊の出世の本懷に、一に此御旨を明すにあるを示して、私共に仰信をすゝめさせられた一章である。

一。「如來の神通力は、法界に悉く周徧して、一切衆生の前に、無盡の身を示現す」太陽の光が、いつも一の光でありながらも、春になれば花の上に紅の色を現はし夏になれば林の上に綠の色を染め、秋になれば野に錦をかざり冬になれば、その代はりに寂い冬枯の風光を示すやうに同一大悲の如來の御光は、世に應じて常に色々の御相を以て、一切の衆生の前に現はれたまふ。應身といふは即ち是である。私共は日光の現はす所の色の數を精しく測ることはできぬ。それと同じく如來の御相は無盡である、而も皆是れ同一の本佛の大御心が現はれたまふ

のである。『楞伽經』に「十方諸刹土の衆生菩薩中所有の法報身、化身及び變化、皆無量壽の極樂界中より出づ」と申されてあるのは、此故であります

三世の諸佛

「長阿含經」

二。されば本佛の大御心は十方に亘ると共に又三世に亘つて無量の顯現をなしたまふのである。近く申せば過去八十小劫の前には毗婆尸佛として、三十小劫の前には尸棄佛毗舍婆佛として、次には拘留孫、拘那含及び迦葉の諸佛として、此世に來らせられた。皆是阿彌陀佛の本願を宣べむがために其如の大御心より來らせられたのである。而して大聖釋尊は實に此等の先佛の後を繼いで同じ御志をもつて、二千四百年の前此世界に現はれさせられたのである。されば成道の後一衣一鉢靜にカピラヴストゥの市を通らせられた時人々は何故に國王の太子でありながら、さやうな生活をなさるゝのであるかと尋ねたに對し、「我は過去の諸佛の裔である、諸佛は此の如く其生を送らせられた」と仰せられました。釋尊は御身においては此世の人御心においては

釋迦佛及び阿彌陀佛

此世以上の御方であつたのであります

三。されば『涅槃經』に仰せられてある。

善男子よ我已に久しく此大涅槃に住して、此三千大千世界において百億の閻浮提に出で、種々に神通を示現せり。此閻浮提毘尼園においては摩耶より生まるゝを示しぬ。時に人々驚き喜びて我を嬰兒といへり。されど我は無量劫來この法を離れたり。唯世間に順ひて之を示せるのみ。如來の身は即ち是れ法身にして、肉血、筋脉、骨髓の成す所にあらざるなり。又生まれて七日人々我髮を剃り、我を導いて天祠に詣らしめ、漸く長ずるや、我に學を授け妻を娶らしめぬ。されど我は無量劫中この法を修れたり。たゞ世間に順ひて之を示せるのみ。後家を出でゝ道を修むるや、人皆悉達多初めて家を出でたりといひ、菩提樹下にありて、道を成するや、人皆我を以て初めて之を成せりとなせり。されど我は已に無量劫中世の王を捨てゝ法の王となり、久しく諸々の魔官を降伏せり。たゞ世間に順ひ、剛強の衆生を降さんがために、之を示せるのみ。而して今に到るまで此界に在りて、數々涅槃を示せり。諸々の衆生皆謂へらく、如來實に滅すと。されど如來の性は、實に永に滅せず。常に知るべし、是れ常住不變易の法なるとを。善男子、此大涅槃、即ち是れ

諸佛如來の法界なり。―「大乘涅槃經」

されば釋尊の御相は一介の老比丘に過ぎなかつたのであるが、其本靈は實に常住にして少しも變易のない大御心其者であらせられた。それ故に八十年の御一生は、實に大慈悲其者の活動より外はない。隨つて私共は釋尊の御上に阿彌陀佛を拜むのである。百歲に足らぬ其御一代の上に無量の時に亘つて動かせたまふ如來の大願業力の御誠を仰ぎ奉るのであります。

四。中にも釋尊の出家の御跡を觀るとき、私共どうして其御慈悲の厚いのに感ぜずにをられやうか。釋尊は先づ之を以て私共に人生の榮華の恃むべきものでないことを示させられた。一たびルンビニの花園に降らせられてより、十九年の間不斷の者は釋尊の御身を取圍み奉つた。一切の歡樂は釋尊の前に示された。國富み家榮え位高く民豐に御身は健に王妃と皇子とは花の如く澤山の臣下宮女は御意のまゝに動くのであつた。然るに釋尊は此榮華は一夜の夢である生老病死の嵐は此間にも吹き來ることを感じさせられた。人間の心靈の奥底に結ぼれつゝある苦の氷は、此浮き立つてをる人生の樂の春風では、とても融かすことはできぬことを覺らせられた。そこで斷然宮中を脫して修行の旅路に上らせられた。淺墓な歡樂の夢に醉ひ、又この夢の得られぬがために悶え騷いでをる私共に向つて何たる厳しき御警覺であらうか。次に釋尊は其御出家を以て私共に大道の何よりも尊いものであることを敎へさせられた。世に王位ほど尊い位はない。王名ほど榮ある名はない。釋尊は此位と名とを有ち、猶其上に妻と子と國民と國土とを兼ねて、人生至上の榮華を有たせられた。而も一たび道を求めたまふに當つてや、皆之を弊履の如くに拋ちたまうた。道の如何に尊いものであるかは實に此世界の歷史に於いては釋尊の出家によつて最も善く證明さるゝのである。されば御出家の一事は私共に正しく世の恃むに足らぬことゝ道の最も尊いものであることゝを示して下さるゝ。而して是が實に本佛阿彌陀如來の因位における

釋尊の成道

薬國捐王の御迹を示されたものであつた。釋尊は此御迹を新に示して、其御身を以て私共を率ゐたまふのである。

五。 次に釋尊の成道の御迹を仰ぐとき、私共は其御慈悲の手強きに感せずにをられぬ。釋尊は之を以て御力の金剛のやうに堅く春風のやうに温かなるを示させられた。六年間の苦行は、釋尊の御身を苦むるが上にも苦めた。此間一粒の木の實、一領の樹葉の衣より外に召させたまふものはなかつた。樹下石上、是れ實に今までの金殿玉樓の代はりに取らせられた住居であつた。其上に六年静觀の間には、恩愛の惡魔は常に〳〵釋尊を亂し奉らむと努めた。一切の煩惱は悉く來つて釋尊を襲うた。カウンディヤヤ等同行の五比丘も釋尊を捨て奉つた。けれども釋尊は少しも動きたまはざること、猶大山王の如くであつた。かくて内外一切の惡魔惡鬼が雲の如く攻め來る其中に坐して十二月八日の曉明星東に閃くを見て廓然として無上正覺を其胸に現はさせられた。此世の夜は此時此ガヤより明けそめた。何といふ莊

「精神講話」

釋尊の宣教

嚴のことであらうか。世尊此時「佛眼」を以て觀見したまふに、三千界鏡の如く獨り「奇なるかな、一切衆生、如來の智慧德相を具有せり」と唱へさせられた。其頃、此世には、未だ一人も如來を仰ぎ其大法に向ふ者はなかつたのである。私共は皆無明の暗黑に蟄めいて居つたのである。然るに釋尊は私共が竟には如來の智慧德相を現はすに到るべきを認めさせられた。私共は今日まで如來を疑ひつゝあつたのに、世尊は、二千四百年の前より既に私共を信じたまうたのである「信ずるは力なり」二人を信ずる者は一人に勝ち百人を信ずる者は百人に勝つ。一切の衆生を固く信じたまへる世尊は今や此世の心靈界の「ジナ」(勝利者)となり帝王となりたまひつゝあるのである。此成道の御力は全く是れ本佛阿彌陀如來の願力の手強きを示させられたものであつた。釋尊は此御迹を新に現はして其御身を以て私共を教へたまふのである。

六。 次に釋尊の宣教の御迹を覓ふとき、私共は其御慈悲の大なるに感せずにをられぬ。釋尊は之を以て大御心の極めて〳〵廣いことを

示させられた。五比丘は釋尊を捨てた者である。然るに釋尊は成道の初、先づ之を迫うてベナレスに下り、厚き教を其上に濺がせられた。逃ぐるものを追ひたまふ本佛の攝取不捨の御心の如何に茲に現はるゝかを見よ。悉掘摩羅は、殘逆無道の惡賊である。然るに釋尊は之を尋ねて、つひに之を助けさせられた。惡人救濟の思召が明かに茲に示されてある。殊に提婆達多は幾度も釋尊を害し奉らむと企てた所の怨敵である。然るに釋尊は『法華』の會上にて、提婆達多の善知識によつて、此道を成せりと宣ひ其上にさへ御慈悲の御手をも降させられたのである。何といふ御慈悲であらうか。此御心を以て五十年の間、廣く四方に向はせられた故尊きも卑きも賢きも愚かなるも男も女も老人も幼兒も凡ての機類が共に之に歸した。「十方の衆生」と呼ばせたまふ本佛阿彌陀如來の弘誓は茲に其面影を現はさせられてある。釋尊は實に此面影を新に映して、其御身を以て私共を諭したまふのである。

七、

次に釋尊の涅槃の御迹を望むとき私共又どうしても其御光の

高きに感せずに居れぬ。諸々の聖者、諸々の弟子、諸々の市民は雲霞のやうにヒラヌヤヴティの河邊なる娑羅の林に集まつた。二月十五日の夜は漸く更け行きて、林中寂然として聲なき時、釋尊は茲に八十年の生涯をゝへて、無上涅槃の聖境を現じたまうた。茲に深くは如來常住無有變易と、一切衆生悉有佛性との兩個の大道を提唱し、近くは少欲知足克己精進の諸德をすゝめて、言々皆涙句々皆血、御語の終ると共に御息は終らせられた。「涅槃經」に宣ふ「爾時、三千大千世界佛の神力を以ての故に地皆柔軟にして、丘墟土沙礫石荊棘毒草あることなく、衆寶の莊嚴、猶西方無量壽佛の極樂世界の如し」と。嗚呼、此時の娑羅樹園には本佛淨土の莊嚴が現はれさせられたのであつた。而して是れ世尊の神力であつたと仰せらるゝ上は其世尊の御力は即ち本佛の御力であつて世尊は即ち本佛御自身であらせられたのである。且つ依報は正報と相應す。依報の國土同じからば正報の尊體亦同じきは申すまでもない。尊體同じからば、佛心亦同しきことも申すまでもない。されば娑

羅樹園の涅槃の會座は正しく是れ本佛淨土の面影であつて、涅槃會上の釋尊は實に是れ彌陀本佛の影現であらせらるゝのである。即ち釋尊は荒涼たる私共の人生をあはれみ、身を以て本佛の尊容を示し、御力を以て淨土の莊嚴を此世に現はさせられたのであります。

釋尊の靈格は阿彌陀佛の應現なり

八。 出家成道宣教涅槃は、佛傳に於ける四つの大事である。殊に涅槃は釋尊御一代の化道の終極であつて、釋尊は茲に多くの者に御自身を最も圓かに現はさせられた。而して其上に、常に本佛の御相の示さるゝより見れば釋尊は、どうしても本佛の應現にましますに相違ありませぬ。隨つて佛傳は正しく本佛の大御心の開展せられたものである。御一身の御生涯が既にさうであるならば、其御語を以て示したまへる御教が同じく本佛の大御心を宣べたまふことを本懷となされてあることは申すまでもありませぬ。

釋尊の教法は彌陀の大悲の宣說なり

九。 先づ之を『華嚴經』に見るに、ガヤの菩提樹下に於ける釋尊の大覺は茲に示されてある。初めて圓融無礙重々無盡の妙理を說いて佛德の宏大を示し終りに「修行の玄樞」華嚴の幽鍵たる『普賢行願品』に移つて、如來の淨土に生まれむことを勸めさせられた。多くの善知識を訪うて竟に斯道を體得せる善財童子は、一に如來の大悲大願の勝德に安せられたのであつた。『華嚴』二經の歸する處、一に如來の靈德を示して之に歸せむことを勸めらるゝより外はありませぬ。次に鹿野苑に下らせられて後の『阿含』に見るに釋尊は茲に四諦、十二因緣、苦空無常無我の大法を說いて、人生の一として恃むに足らざるを警めさせられた。『華嚴』の宣說を積極の方面であると申すことができるならば『阿含』の宣說は消極の方面である。此二面の宣說は、猶次いで之を重ねたまうて、方等の諸經には主に廣く佛德及び佛境の大を說き、『般若』の諸經には強く自力妄執の分別を破り『法華』及び『涅槃』に入りては、此積極消極の二面を合はせて、一方に如來及び佛性の常住普遍なるを示し、一方に小我及び其偏執の如幻虛假なるを斥けさせられた。それ故、一代八萬四千の法門大小權實半滿偏圓色々に分れてをるけれども、皆是れ自力の小見を

「華嚴經」の「入法界品」

捨てゝ、一に如來の靈德に歸することをすゝめたまふより外はない。

それ故荊溪は「諸教讃ずる所多く彌陀に在り」と申され傳教は『法華』を釋して、「はじめ妙法蓮華經より、をはり作禮而去にいたるまで、一一の文字は殊妙の理なり、みなこれ西方の阿彌陀佛なり」と申され、蓮如上人は「一切の聖教といふも、たゞ南無阿彌陀佛の六字を信せしめむがためなり」と仰せられました。

「御文」淨土の三經

一〇。されば一代の諸教、皆是れ如來の大御心を示したまふものである。而も其宜べたまふ所、概ね粗くある。之を細に說きたまふものは即ち淨土の三經である。三經とは『無量壽經』即ち『大經』『觀無量壽經』即ち『觀經』及び『阿彌陀經』即ち『小經』である。『大經』は釋尊が成道第二十六年以後に於いて、摩竭陀の靈鷲山にて、尊者阿難及び聖者彌勒等に對して說かせられた御教を傳へたもの、『觀經』は成道第四十三年の頃、靈鷲山の下なる王舍城の宮中なる囹圄に於いて王后韋提希等のために說かせられた御教を傳へたもの、『小經』は御涅槃に近づきたまへる頃、舍衛國の祇園精舍にて、尊者舍利弗等に向つて說かせられた御教を傳へたものである。中において『觀經』は顯には如來の第十九願の思召を示し、『小經』は第二十願の思召を示して、實には共に第十八願の思召を宣べ、『大經』は全く第十八願の本意を中心として、詳に先づ如來及び淨土の因果を明し、次に之を示したまふ大行の御名と之を受くる衆生の信と、それによつて得らるゝ現在の生活と當來の大證とを宣べさせられた。行信證の三法は、完く此一經の教に示されてある。而して教行信證の四法は皆是れ本願の結果である。本願は其體御名である。されば此經の中心は、正しく如來の本願を說きたまふ所にあつて、其體は全く唯一の御名である。『大無量壽經』は、即ち御名の經典である。語を進めて申せば、此經は、御名其者である。されば地上何處を鑿つも、水が湧き出づるやうに、私共は『大經』一部何處を窺つて見ても、御名其者の御旨に觸れぬことはありませぬ。

萬法、佛法、釋尊の中心は一佛名也

一一。然るに廣く思ひ回らせば、一切の道理は、悉く釋尊一代の宣說

に基き、又之に收まる。釋尊一代の宣說は、悉く淨土の三經に基き、又之に收まる、淨土の三經は、全く『大經』一部に基き、又之に收まる。而して『大經』一部は、唯一つの此御名に依り、此御名に歸する。されば此御名は實に一切の道理の唯一の中心であつて、天地の諸法は、正しく之によつて統理せられ、之を樞軸として活動してゐるのである、實に遠く三界を過ぎて高くして高い此世以上の御國より下つて、低くして低い此世の私の胸の奥にとゞき、大なる宇宙人生の中心生命となつて、又小なる私の中心生命となりたまふのは、此御名である。釋尊は此御旨の深くして廣きこと海の如き本願の御名を、『大經』の會座にて圓かに細かに宣べさせられた。出世の御本懷は、玆に明かにせられた。畏けれど衷心の御滿足は其御相に現はれさせられた。經に、「爾時世尊、諸根悅豫し、姿色清淨にして、光顏巍々たりき」と仰せられてある。尊者阿難が驚き異みて其故を問ひ奉られたのは、偶然のことではありませぬ。圓かに本佛の御旨を宣べたまふ釋尊は、此時正に本佛御自身であらせられたのであります。縞に思ふ、『華嚴』の會座は、釋尊が獨り完く本佛の智慧を現じ、『大經』の會座は、世に精しく本佛の慈悲を宣べ、『涅槃』の會座は、世に廣く本佛の淨土を示したまうたものであらうと。

一二、

嗚呼我が人生は、荒涼たるものではなかつた。此世界は罪惡の塵のみ漲つてをる沙漠ではなかつた。固より果敢なき運命を思へば寂しく、我が罪を思へば、淺ましく感せずにをられぬ。けれども之がために我大慈悲の御父は救濟の緣として、其御光を以て私共を照し導き育てたまふのみでなく、又救濟の因として其大行の御名を成就なされたのみでなく、身親ら之を今日の私共に傳へむがために、釋迦牟尼の御名を以て此世に來らせられたのである。而も之が一度のみではない、『梵網經』の御語によれば、既に八千返此世に來らせられたと仰せらるゝ。かほどまでの厚き御引立により、今や私共は初めて二千四百年前の御出現の上に、本佛の御相を望むことができた。我が人生は、玆に大慈悲の如來を迎へたのである。我が塵界の上に玆に勝過三界の淨土

を映させられたのである。私共徳なく智なく、罪悪愚癡の身をかゝへながら、何といふ不思議の御縁ぞや、世尊の遺教によつて、御在世の當時の同胞と共に朧げながらも、之を望むことができる。人生の光榮、塵寰の光榮、又私共の光榮、何ものか之に過ぐることがあらう。

光榮の充足

一三。時代濁り、衆生濁り、邪見競ひ爭ひ、貪瞋あれ狂ひ、愈〻永遠の生命に遠かつて墜け易い生命に在るをも顧みで、殘虐無道正に背き邪に歸し、長へに生死の廣き海に迷ひ、煩惱の深い海に漂うて嚴しく修行するの力なく、深く思惟することのない私共が、今正に此無上の光榮を享けてをるのである。私共は此光榮を無に致してはならぬ。若し之を無にするやうなことであつたならば、管に私共再び此苦海に漂ふの運命を脱るゝことができぬばかりでなく、實に申樣のない次第ではありませぬか。「他力の願行を、ひさしく身にたもちながら、よしなき自力の執心にほだされて、むなしく流轉の故郷にかへらんこと、かへす〳〵もかなしかるべきことなり。釋尊もいかばかりか、往來娑婆八千返の甲斐なきことをあはれみ、彌陀もいかばかりか、難化能化のしるしなきことをかなしみたまふらむ。もし一人なりとも、かゝる不思議の願行を信ずることあらば、まことに佛恩を報ずるなるべし。」今我が聖人が此偈に於いて「五濁惡時の群生海、應に如來の如實の言を信ずべし」とすゝめさせられたのは、正に私共をして、本佛の御慈悲に對し、釋尊の御大恩に對し、又自分自身のために是非とも早く此光榮に副はしめやうとの懇なる御思召のために相違ありませぬ。

「安心決定鈔」

第七章　御名に於ける生活

(一)　我等直に佛地に在り

能發一念喜愛心、不斷煩惱得涅槃。

【讀方】　能く一念喜愛の心を發せば、煩惱を斷ぜずして涅槃を得。

【字義】　煩惱とは私共の罪惡のことで、罪惡は我が心を煩はし惱ます故に、之を煩惱といふ。

【大意】　能く一念、御慈悲について、歡喜愛樂の心を發すとき、煩惱を斷たずして、この罪惡あるまゝ、私共は涅槃に向ふべき身の上にさせていたゞくのである。

【文科】　これまで本佛の因果を宣べ、次に此旨を取つぎたまふ釋尊の御教を宣べさせられた故、之より二尊のおほせに順うて御慈悲の御名の御旨を信ずる其功德を宣べたまふのである。今は其第一として、私共は信ずる時、此まま直に向上の身の上となることを示したまふのである。

煩惱の名義

心獄の宿

一。旅に出て、最も大切なことは、宿を定むることである。秋の空いかに變はり易く、冬の日どのやうに暮れ易くとも、一たび我身を落ちつかすべき宿が定まつてあるならば、少しも、それが苦になりませぬ。「宿札打つて置いて、名所見物をする」ほど、氣のゆるやかなものはありませぬ。心の上のこと、亦同じである。私共は、此人生の旅路においては、是非とも、心靈上の宿を定めねばなりませぬ。「濁世の起惡造罪は暴風駛雨のごとくなり」。胸の中には、煩惱妄念の風雨が荒れ騒いでをる。身の上には、生老病死の風雨が烈しく攻め寄せてをる。止むことのない風雨は、一身の内外を苦めてをる。其上に生涯の夕は今に來るやらも知れぬ。私共は是非とも茲に永久の平安を得べき宿を得ねばなりませぬ。

「和讃」

「如來の室に入れば即ち如來の室とは大慈悲なり」

「法華經」

二。其宿は何れに在るか。申すまでもなく如來の御慈悲より外にはありませぬ。『法華經』に仰せられてある。

三界は安きことなし、猶火宅の如し。衆苦充滿して甚だ怖畏すべし。常に生老病死憂患あり。是の如き等の火、熾然として息

ます。如來已に三界の火宅を離れて、寂然閑居して林野に安處す。」今此三界は皆是れ我有なり、其中の衆生は、悉く是れ吾子なり。」今此處に諸の患難多し。唯我一人、能く救護をなさむ。

「五濁の凡愚をあはれみて、久遠實成の本佛の御光より、カピラヴストウの城に應現なされたる釋尊の御聲は、即ち本佛の御聲である。釋尊の「我一人能く救護をなさむ」の御語は、即ち本佛の「我能く汝を護らむ」の御語である。私共は釋尊の上にあらはれたまへる本佛阿彌陀如來の大御心が、正しく私共の唯一の宿であることを窺はずにをられませぬ。

『阿含』には如來は我舍である、我洲である、我が覆、我が蔭であると示されてあります。

【浄土和讃】

御名は佛心を見るべき門也

三、然るに本佛彌陀の大御心は、唯一の御名の上に顯はれさせられてある。釋尊の御教の中心も、亦此御名より外はない。御涅槃の折釋尊は御弟子の方々に向はせられて、「我が說ける諸の法は即ち是れ汝等の師なり、善く之を奉ずること、我に於けるが如くせよ」と仰せられてあるが、此常住の師であらせらるゝ教法の焦點は、即ち此御名である。されば、私共は此一つの御名の上に、阿彌陀如來の御心を觀たてまつると共に、又釋尊の本意を拜むことができる。即ち之によつて、私共は無限大悲の大御心の我上に照臨したまふことを知ると共に、又二千四百年前の釋尊の御心に直に觸るゝことができるのである。之について私は此に一兵士の話を想ひ起さずにをられませぬ。

【小乘涅槃經】

三重縣の一兵士

四、明治三十八年の冬、日露戰爭が漸く終はつた頃のことである。生まれは三重縣の一兵士が彈丸のために兩眼をつぶされ、又兩方の耳も聞こえぬやうになつたが、幸に命だけは拾うて、戰地より國元に歸つた故、其母が之を迎へに出ました。然るに其兵士は眼も視えず、耳もきこえぬ故、どうしても之を知らすことができぬ。そこで或人が考へて其兵士の手を取り母の乳房を握らせたれば、兵士は今までの沈み勝であつた面の上に、にこつと笑を浮べて、おつかさんですか、というて喜びました。他の者は何とも申されぬ感に動かされて、ぢつとして側に見

てをることができなかつたと申すことである。洵に聞いたゞけでさへ涙の催さるゝやうな話でありますが併し、私共の身の上が、亦善く此兵士と似てをるのであります。此兵士は露西亞人との戰爭のために名譽ある負傷を致した。私共は煩惱の惡魔に負けて、罪惡の彈丸によつて、不名譽の負傷を致した。之だけは違ふけれども、彼の兵士が見えず聞こえぬやうになつたと同じく、私共は智慧の明を失ひ、智慧の耳を失うた。そのために我眞實大悲の御父が遠き昔より私を迎へたまうて、其御光を我が上に放つて下されてあるけれども、それを拜むことができず、其御聲を知ることができなかつた。然るに今は何の幸ぞや。私共は御名の御乳房に觸るゝことができた。彼の兵士が母の乳房にさはつて母の來たことを知つたと同じく、私共の心は、この南無阿彌陀佛の御名に觸れて、無限大悲の御親が夢にもあらず、現にもあらで、實に我が上に照臨なされてあることを感ずる。洵に御名は、私共が佛に會ふことのできる門である。私共は茲に休息の宿を得ることができる。

御名は乳房也

茲に我家がある、我國がある。御名は實に我世界である。「こひしくば南無阿彌陀佛をとなふべし、われも六字のうちにこそすめ」私共は此御名の外に私共の精神を止むべき一寸の空地だも認むることはできませぬ。信仰の上の生活は、即ち御名の中の生活であります。

御名は我國也

五、一念の歡喜

こゝに到つて、私共の心竊に歡喜と愛樂との思の湧くのを抑へることができませぬ。ちやうど、腐つた鰯を打捨てゝも、皿の上には暫く其餘臭が殘つてをるやうに、妄念妄執の根本は獲信の一念に打切られても、其習氣がなかなか去りがたいため、其喜びといふも、樂みといふも、固より細々しくは思はるゝけれども、而も信念の上に立ちかへつて既往を顧み、轉じて現在を見れば、精進の樞くだけ安うして、煩惱の風の止めがたきに惱み、志願の戸よわくして誘惑の雨を防ぐことのむつかしいのに苦むだものが、今は弱きまゝ、堅固なる御名の門の中に安らかに休み、手丈夫なる「大慈悲の室」の中に靜に息ふ。彼の樣々の憂や悲が、いつのまにか解け去つて、どことなう春風に身を溫めらるゝやうに感

一念の歡喜

ずるのである。而して今までのやうな忽の中に苦や憂にかはる空な樂や喜ではなくして、變ることのない眞實の歡喜愛樂の泉が深く我胸の底に流れて參る。此心が我が凡情の中よりできるはづがない、全く是れ御名によつて我に與へられたる雜氣のない純一無二の信心のはたらきである。それ故、この信心をば、今一念喜愛の心と仰せられたのである。私共、今、能く此一念喜愛の心を發するとき、我は宿を得たのである、門に入つたのである、父を望むことができたのである。私は、もはや三界の流浪人ではない、孤兒ではない。「三界の繫業は畢竟して牽かず」私共は今は他力「自然の牽く所」なつてをる。もはや菩薩の列に入つたものである、佛の寵兒である。如來の御許によつて、如來とひとしき身の上に引き上げられたのである。かくて私は此最も汚れた最も賤い弊垢の身を以て、最も尊く最も高い涅槃の靈臺に上ることのできる身分となつたのである。極惡最下の奴隸は、如來の御名を享けて、今や天地六合の最高の位の前に立つことができたのである。

「淨土論註」

「華嚴經」

このまゝ煩惱得涅槃

六。この身の上になるに、いくらかの支度を要するか。少しも要せぬ。このまゝである。炭團は、いかに磨くとも、その黑いのを改むることはできませぬ。而もそのまゝ之を火に投げ込むとき、見よ、今まで黑かつた炭團は、紅玉のやうに麗はしく燃ゆるではないか。而して一たび燃えついた火は、もはや炭團を離るゝことはありませぬ。私共の御慈悲に歸することも亦この通りである。佛は我が暗く汚れて而も弱いことを明に御存知なされてある。さればこそ我が上に救の御手を下したまふのである。どうして我が上に、むつかしきことを命じたまふことがあらう。それ故改まつて歸するのではない、歸して改むるのである。明かになつて信ずるのではない、信じて明かになるのである。志を固うして信ずることにかゝるのではない、信じて志を固うしていただくのである。御力に歸するには、このまゝである。唯今、此處で、此自分が、此まゝで御力によるのである。「佛いかばかりのちからましますとしりてか罪惡のみなればすくはれがたしとおもふべき」。煩惱いか

「唯信鈔」

に多からうとも、御たすけの前には、何等の力もない。

無明長夜の燈炬なり、　智眼くらしとかなしむな。
生死大海の船筏なり、　罪障おもしとなげかざれ。
願力無窮にましませば、　罪業深重もおもからず、
佛智無邊にましませば、　散亂放逸もすてられず。」

「正像末和讃」

このまゝにて歸するとき、このまゝにてたすけたまふのである、「煩惱を斷せずして、涅槃を得。」如來他力の大道が、一切の倫理にすぐれ、一切の宗教にすぐれたまへる處、一に茲にあることを忘れてはなりませぬ。

盛岡の一同行

七。陸中の盛岡に一人の篤信なる同行がある。或年の報恩講に、遠如上人の『御文』を讀んだ處、その「大阪建立の御文」に「あひかまへて〳〵、この一七ヶ日報恩講のうちにおいて信心決定ありて、我人一同に往生極樂の本意をとげたまふべきものなり」との御語に感激して、七日のうちに信心を決定せよと仰せらるゝ上は、信心の決定ができるに相違ないと思ひ、日々引續き、寺に參つて、熱心に聽聞をしたけれども、少しも分らぬ。つひに御滿座の法筵に列つたが猶分らぬ。力を落して、家に歸らうとしたが、それでも猶一度尋ねて見やうと思ひ、いかにしたらば信心の決定ができるであらうかと、住職に尋ねた處、住職の僧が直に、其許は御身が平生拜讀する所の『正信偈』に「不斷煩惱得涅槃」の七字があるのを知らぬのかと申された。之を聞くなり、永の間の心中の暗いのが、廓然と明るくなつて、餘のうれしさに、我を忘れて家に飛び歸つたと申すことである。實に「不斷煩惱得涅槃」、この七字に、大悲の血が流れてある。

煩惱の滅否

洵に是れ弱い者の杖、恐かなる者の力、煩惱罪惡の私共の生命である。而して其證據は現に此盛岡の一同行の上に示されたのであります。

「御一代聞書」の上卷

八。私共爰に於いて煩惱のまゝに救濟を信ぜずにをられぬ。而も此煩惱がいかになるか、私共は之を辨へることを要せぬ。選如上人の御弟子順誓は之について、上人に尋ねられた「御文」には、信の一念に罪みな消えて正定聚のくらゐに定まると仰せられてある、然るに罪は命のある間殘つてをるとの御旨もある、いかに心得たらば宜しいでありま

「正信偈大意」

せうか」と。其時上人は「一念のところにて、罪みな消えてとあるは、一念の信力にて往生さだまるときは、罪はさはりともならず、されば無き分なり、命の娑婆にあらんかぎりは、罪はつきざるなり」と仰せられ、次に御語を進めて、「罪のあるなしの沙汰をせんよりは、信心を取たるか取ざるかの沙汰、いくたびも〳〵よし。罪きえて御たすけあらんとも、罪消すして御たすけあるべしとも彌陀の御はからひなり。我としてはからふべからず。たゞ信心肝要也」とくれ〳〵も仰せられた。何といふ昭乎とした指圖であらうか。凡てを任せたてまつゝた上は、皆あなたの御計にまかすれば、宜しい。私共の罪のなやみのためばかりに、御たすけの御手を垂れたまふ御親ではないか。どうして惡しく計はせたまふやうなことがあらう。御約束の御名は、いつも變らず、私共に聞こえてをるではないか。「わが身には煩惱を斷せされとも、佛のかたよりは、つひに涅槃にいたるべき分にさだまるものなり」。是が此偈の一節についての遂如上人の解釋であります。

三毒ならびに本願

「御本書」の「行卷」

九。「われらがこゝろ、すでに貪瞋癡の三毒、みなおなじく具足す。これがためとておこさるゝ願なれば、往生、その機として必定なるべしとなり。かくこゝろえつれば、心のわろきにつけても、機の卑劣なるにつけても、往生せずばあるべからざる道理文證勿論なり。いづかたより か凡夫の往生もれてむなしからんや。然ればすなはち五劫の思惟も兆載の修行も、たゞ親鸞一人がためなりとおほせごとありき」。『口傳鈔』の第七章の文は、正しく此偈の本髓を掴み出して示させられた御語であります。

一〇。私共既に涅槃に入るべき身分に定められた。煩惱の重荷は恐れ多くも彼の御慈悲の御計ひに任せ奉つた。身輕く心安らかに、たゞ近よる前途の光明を樂みつゝ進むより外はない。「大悲の願船に乘じて光明の廣海に浮びぬれば、至德の風靜にして衆禍の波轉ず。即ち無明の闇を破し、速に無量光明土に到りて大般涅槃を證し、普賢の德に遊ふなり」。之が正しく御名の中に息へる者の幸福の一つであります。

(二) 我等悉く一道に在り

凡聖逆謗齊廻入、如衆水入海一味。

【讀方】凡聖逆謗齊しく廻入すれば、衆水の海に入りて一味なるが如し。

【字義】凡とは凡夫、聖とは聖者、逆とは五逆の者、謗とは謗法の者をいふ。

五逆の名義

中に於いて、五逆といふは、道に逆へる五種の罪のことで、之に小乘の五逆と大乘の五逆とがある。小乘の五逆とは、(一)故らに思うて父を殺し(二)故らに思うて母を殺し(三)故らに思うて聖者を殺し(四)迷倒の意見を以て、僧伽の和合を破り(五)惡心を以て佛身より血を出す。この五つである。大乘の五逆とは、(一)寺塔を破り經藏を燒き、佛法僧三寶の財物を盜み用ゐ(二)聖聞、緣覺、菩薩三乘の法を謗つて、之を障へ、之を破り、(三)修道の人を辱め害ひ、(四)父を殺し、母を殺し、聖者を殺し、僧伽の和合を破り、佛身より血を出し、(五)因果の大法を否みて、常に、殺生、偷盜、邪淫、妄語、綺語、惡口、兩舌、貪慾、瞋恚、愚痴の十惡を行ふ。この五つである。今は此二つの中、大乘の方を用うる。

【大意】凡夫聖者、五逆謗法、いかなる者であらうとも、齊しく如來の御力に歸すれば、ちやうど、諸の川水が、海に入つて一つの鹹い味となるやうに、皆同一の御慈悲を味はさせていただくのである。

【文科】信念の功德の第二として、同信の者は共に平等一味の德を感ずることを宣べたまふ一節である。

一。私共の生活において、最も得たいものは何であるかと申せば、平和である。百萬の富があらうとも、王侯の位があらうとも、其生活に平和がなかつたならば、それが何の幸であらうか。若し一點眞實の平和があるならば、埴生の小屋にも、溢るゝほどの樂が湧いて參る。眞實の福祉は眞實の平和の上にあらはれます。佛敎は平和の宗敎である。涅槃とは寂靜即ち眞實の平和の義である。この平和を先づ、我心に受けて之を人に及ぼし、終に此世の上に普く平和の光を被らすのが、佛敎徒が此世においてのつとめであります。三寶の中に佛と法との次に示さるゝ僧即ち僧伽といふのは、此平和の組合を申すのである。若し

互に相爭ふやうなことであつたならば、たとひ袈裟をかけ珠數をもつても、そは實は僧ではありませぬ。『般泥洹經』に仰せられてある、「汝等、道を同じうす、和せざるべけむや。其惡道に墮つるは、皆和せざるが故のみ。」大聖釋尊は、爭を起さんためではない、實に平和を降さんために來らせられた御方であります。

平和成立の要件

二。然るに世の中の眞實の平和は互に相通ずる所を認めなければ出來て參りませぬ。而も其通ずる所が最も深くなければなりませぬ。互に琴を好む。そこで琴の上の友ができる。けれども之だけでは此兩人は、琴を離れては和ぐことはできぬ。互に酒を好む。そこで酒の上の友ができる。けれども之のみでは此人々は、酒の外には常に親むことはできぬ。共に同一の學問を修め、共に同一の職業を勤むる、これだけでも其和合が其間に成立つて參る。けれども其和合の度が、まだ學問や職業の間に限られて、常に和ぐことができぬ。常に和ぐには酒食の上や嗜好の上ではない、學問や職業の上でもない、猶進んで國土や血族の關係でもなく、一層深く進んで私共の心靈の奥深い處に、互に相通ふ所がなければならぬ。若し之がないときには、他の點においては、いかに一致してをつても、何となしに多くの折に、自他の間に城壁ができて、打解くることができぬ。然るに若し一點この深い一致があつたならば、他の點は、いかに異つて居ても、常に彼我の心が互に圓かに融け合うて、申樣のない尊い趣を感ずることができる。之は單に目前の人々の間ばかりではない、時代の異り土地の隔たつてをる人々の間にも此趣は同じやうに感ぜられて、時も遠ひ處も遠ひ樣々の風俗や習慣や言語やは、遠く彼と我とを隔てやうとするにも拘はらず、兩方の心と心とは互に響き合うて、彼の胸の上の鼓動が、一々我が胸の上に感じ得らるゝ。此折の靈妙なる趣は、とても言語の詮はし得る所ではありませぬ。此趣を感じ來つて始めて、此人生其者の上にも、一つのにぎやかな趣を味ふのである。洵に和は天下の達道である。和なくして私共の生涯には及が閃き、和があつて、此處に福が漲るのであります。

信心と平和

三。此眞實の平和を與ふる大本が、即ち如來回向の信心である。互に各自の容貌のやうに異つてをる精神を以て相爭ひ相軋つて止むことのない私共は、此信心一つによつて始めて此平和に入ることができる。其故は私共、此信心によつて全く自分の我執我慢を打倒されて共に唯一の如來の大道に進ませていたゞく故である。「同一念佛無別道故」とは『淨土論註』の御語である。如來も唯一の如來であらせられ、其御名も唯一の御名、其御力も唯一の御力。故に此御名を聞いて、此御力に憑れる信心、亦同一であらねばならぬ。私共今や共に我心靈の奥底に此同一の信心を得て、唯一の御名の中に生活する身の上となるならば、私共はたやすく此唯一の信心において和ぎ、此唯一の御名において打解けて、差別の其底に心絃共鳴の妙趣を味ふことができるのであります。

信心の同異

四。けれども此道理は、他力の道理を味はぬ人では了解することができませぬ。此等の人々の考は、いつも自分を本としてをる。隨つて自分と他人との差別を忘るゝことができぬ、而して此差別してをる私共が起す所の信心である故、信心亦同一であることはできぬ、百人あらば百人、千人あらば、千人、其信心は皆異つたものでなければならぬといふのが彼の人々の考である。而して七百年の前親鸞聖人と爭うた吉水の諸學者の考も、之と同じであつた。けれども法然親鸞の兩聖人と共に私共の考は之と異つてをる。私共の信心は全く他力の回向であつて、其中に毫末も、この自分の凡情が雜つてをらぬ。衆生の機相はといへば、凡夫あり、聖人あり、五逆あり、謗法あり、善惡染淨、貴賤貧恐、老若男女、貧富强弱其差別は無量であるけれども如來の大道に入れる者は、一分だも、此機相をはたらかせぬ。聖人も凡夫も、此度の生死出離の一大事については、共に同じく間に合はすべき能力のないのに慚ぢ入り、善人も惡人も限りない如來の大御心に對しては、共に同じやうに汚れはてた罪惡の身であることに恐れ入つて、凡聖逆謗共に齊しく「雜修雜善の川水を轉じ逆謗闡提恒沙無明の海水を轉じ」回らして、此唯一如來の

「御傳鈔」の上

「御本書」の「行卷」

御慈悲に入つて、その與へられたる信心をいたゞいたのである。既に共に同一他力の御回向ならば、どうして其間にかはるといふことがあらう。

信心のかはるとまふすは、自力の信にとりての事也。すなはち、智愚各別なるが故に、信又各別也。他力の信心は善惡の凡夫ともに、佛のかたよりたまはる信心なれば、源空が信心も、善信房の信心も、さらにかはるべからず、たゞ一つ也。—「御傳鈔」—。

黄河の水は濁つてをる、楊子江の水は濁つてをらぬ。清濁大小いかに異るとも、共に太平洋に入りをはつた時、二つの間に、其味に何の區別があるか。同じ一つの鹹い海水ではないか。地位能力、形相性情、其他さま〳〵の差別は、いかに人々の身の上にあらうとも如來の御名の中に入りをはれば共に同一の佛子であつて、同一の法味を享け同一の法位を與へらるゝのである。

名號不思議の海水は、逆謗の屍骸もとゞまらず。
衆惡の萬川歸しぬれば、
盡十方無礙光の、
煩惱の衆流歸しぬれば、
彌陀智願の廣海に、
歸入しぬればすなはちに、
功德のうしほに一味なり。」
大悲大願の海水に、
智愚のうしほに一味なり。」
凡夫善惡の心水も、
大悲心とぞ轉ずなる。」—「和讃」—

今此偈に、「凡聖逆謗齊しく廻入すれば衆水の海に入りて一味なるが如し」と仰せられたのは、此故であります。

五、 既に一味と宣ふ。一切の差別は全く消え失せて、ちやうど大風に灰を撒いたやうになるといふのではない。さまざまの差別の相は今までのやうに殘るであらう。けれども同一大悲の海中にをる者は各其差別の相をもちながら、其中に同一の尊い佛心を受け、同一の尊い佛子として、同一の尊い御光に護られてをる故、自ら尊ぶと共に又他をも尊び他をも重んずると共に、又己をも重んずる。是において私共が、世に處する思想が、今迄と全く其趣をかへて參る。御名の大道に入ら

一味の眞旨

ぬ前は、一々の差別の上に價値の相違を認めて、富めるは貧いよりは尊く、譽の少いのは譽の多いよりは賤しく思うてをつた。それ故富める者は貧しき者を賤み、貧しき者は富める者を怨み、譽の高いのは譽の少いのを侮り、譽の少いのは譽の多いのを妬むでをつた。其外賢愚貴賤凡ての差別の間に、到る處怨恨軋轢嫉妬輕侮さま〳〵の煩惱の火が燃えてをつた。然るに今は共に此大道に入つて考へて見て、此の上もなく尊い所の價値ある佛心に比べて見れば、誠に日光の前の燈の如きに過ぎぬ。我今此光を享けてをる。悲むこともなければ、羨むこともない。唯滿足がある、歡喜がある。位低ければ低きに安んじ、位高ければ高きに喜ぶ。財少くとも少きに泣かず、財多くとも多きに傲らぬ。「其位に素しては、行其外を願はず、富貴に素しては富貴に行ひ貧賤に素しては貧賤に行ひ、夷狄に素しては夷狄に行ひ、患難に素しては患難に行ひ、君子入るとして自得せざることなし」、其上に互に敬ひ互に愛して、昌平和樂の生涯を進めて參ることができる。それ故今までは、さま〳〵の差別あるがために、さまざまの煩惱が起つたのに、今は此等の差別あるがために、却て社會が美しく裝はれ、人生が此ために柳櫻をこぎまぜて、都ぞ春の錦なる風光を現はすのを喜ぶに到るのである。即ち差別に在つて差別を超え、相對に在つて絶對を喜ぶ生活に入ることである。これに於いて始めて眞實の平和があらはるゝ。或人が信念の獲得は或點において私共の精神の方向轉換である、今まで前に見えたものが、今は後に見え、今まで左に見えたものが今は右に見え、今まで惡しく見えたものも、今は善く見ゆるやうになるといはれたのは、即ち此處の味に合うて居ります。

差別の上の平等

六。 此平等の大道、即ち是れ親鸞聖人が其御生涯の上に現はされた大道であります。聖人は其御仲間において師弟の別さへ認めたまはなかつたのであります。固より其所信を熱心に傳へたまふことは申すまでもない。傳へたまふ故、之を受けらるゝ者のあることも勿論である。けれども聖人は師弟といふ階級的差別を以て之を區劃す

親鸞聖人の平等主義

ることを避けさせられた。「親鸞、さらにめづらしき法をもひろめず如來の敎法を、われも信じ、人にも敎へきかしむるばかりなり。そのほかは何をゝしへて弟子といはんぞ」とは是れ聖人の御語であつた。それ故、聖人は其御仲間の人々に對しては、たゞ「同朋」及び「同行」とかしづきて仰せられたのである。されば此道に歩む者は、皆同朋である、同行である。「遠く通ずるに、夫れ四海の内、皆兄弟と爲す也」「さきに往生するひとも他力の願行に歸して往生し、後に往生するひとも正覺の一念に歸して往生す。心蓮華のうちにいたる故に、四海皆兄弟なりといふなり」。「蓮如上人、仰せられ候。信をえつれば、さきに生まるゝ者は兄、後に生まるゝ者は弟よ、法敬とは兄弟よと仰せられ候。佛恩を一同にうれば、信心一致のうへは、四海みな兄弟といへり」。

七　嗚呼、「同朋」「同行」、いかに麗はしい名ではありませぬか。此如來の大道に入る時、私共は此麗はしい名を戴くのである。「四河海に入て復本名なく、四姓家を出てゝ、同じく釋氏を稱す」。遠く二千四百年の前を見るに、摩訶迦葉は學德共に高い哲人であつた。周利槃特は聞恐一字をも容易に覺えられない程の方であつた。而も如來の聖會では、共に同朋であつた。頻婆娑羅は印度摩竭陀の君主であつた。惡掘摩羅は殘虐無道の逆賊であつた。而も世尊の僧伽では、共に同行であつた。近く七百年のまへを望むに、藤原兼實は關白であつた。耳四郎は盜人であつた、けれども亦互に同朋であつた。聖光房及び善慈房は碩學であつた。室の遊女は賤き者であつた。けれども亦互に同行であつた。此の道に於ては、どの樣な賢人も、一文不知の愚夫と手を携へて進むのである。いかなる傾德も不德無道の惡人と肩を並べて歩むのである。王侯と乞食と、貴族と平民と、主人と召使と、地主と小作人と、親しく語らひながら行くのである。私ども極惡底下の徒ら者も恐多くも古聖先賢と共に進むのである。「一人居て喜ばゝ二人と思ふべし、二人よりて喜ばゝ三人と思ふべし、その一人は親鸞なり」。我が聖人は七百年の昔より來つて私共につきそひ給ふのである。「我が正法の身を見る者には、我現

[獄異鈔]
[口傳鈔]
及び[御文]第一帖
四海兄弟
[淨土論註]
[安心決定鈔]
[御一代聞書]
同朋同行の名
[阿含經]
如來の聖會—僧伽

に世に在り我は常に彼を見、我は常に彼に離れず」。我が世尊は、二千四百年の昔より來つて私共に離れたまはぬのである。かくて私共は又茲に唯今、我が如來と共に歩むのである。煩惱に眼さへられて拜むことはできねど、我佛の御像常に諸の菩薩と共に私共の上に來らせられてある。「念佛の艸庵は隘しと雖も、恒沙の聖衆、雲の如くに集ひて、菴羅園の華座に同じく、三昧の道場は狹しと雖も無數の賢聖側塞して靈鷲山の苦薩に等し。十萬億刹、宛も咫尺の如く、膝を容るゝの丈室殆ど太虛の如し」。私共は實に讃仰感謝の思にたへませぬ。

「漢語燈錄」

如來の聖會は一佛名によつて結ばれたる教團也

八。南無阿彌陀佛の御名は洵に永劫朽ちぬ靈の絲である。如來は之を以て御自分と私共とを結びたまふと共に又古今東西に離れてゐる私共相互を結びたまふのである。かくて唯一の如來を中心とし其唯一の御名を以て一つに結ばれたのが即ち是れ私共の組合である、僧伽である、如來の聖會である。此一すぢの靈の絲には、大慈の御血が通うてゐる。此御血は箭よりも早く、如來と我、我と同朋同朋と如來、この三組の間をたえず、流れ、たえず昇降し、たえず往還して、私共を皆一樣に温めたまふのである。されば我胸一たび此温みを感じましたならば、私共は我が僧伽の同朋が、又同じやうに、此温みを感じてゐることを思はずにをられぬ。一つの鳴子の鳴るときは、他の鳴子の鳴る時である。我が御名を稱ふる時は、又同じく他の同朋が、此御名を稱ふる時である。かくて如來は御名を以て、私共同胞を呼びたまふ故、私共亦御名を唱へては、如來を念ひ、同胞を想ふ。同胞亦御名を唱へては如來を念ひ私共を想ふ。同一の御名によつて、親も子も同胞も、互に呼び合うては、慰を受け力を享く、之が私共の生活の風光である。是に至つて、現在の社會は、このまゝ私共にとつて、尊い花園である。社會主義を唱へ、平等主義を唱へ、黃金世界を夢みてゐる人々の理想は、一に此御慈悲の中の生活に於いてのみ、實現することのできるものであるといふことは、私共の深く信ずる所であります。

信心と社會主義

九。此の平等一實の大道、是れ實に私共一切衆生の進路である。進

路既に平等であれば、到り着く所の淨土亦平等でなければならぬ。「大願清淨の報土には、品位階次をいはず、一念須臾の間に、速に疾く無上正眞道を超證す」。この平等同體の妙覺が即ち私共の向ふ所の涅槃であります。釋尊最初の御說法なる『華嚴經』の一道、又涅槃以前の御說法なる『法華經』の一乘、亦斯道を示したまふより外はありませぬ。親鸞聖人の『御本書』行卷の御指圖は正に此にある。されば是れ一代佛敎の根本基礎であつて又同時に究竟の焦點たるべきものであります。

『御本書』の「信卷」

(三三) 我等常に慈光に在り

攝取心光常照護、已能雖破無明闇。
貪愛瞋憎之雲霧、常覆眞實信心天。
譬如日光覆雲霧、雲霧之下明無闇。

【讀方】攝取の心光、常に照護したまへば、已に能く無明の闇を破ると雖も、貪愛瞋憎の雲霧は、常に眞實信心の天を覆へり。譬へば日光の雲霧に覆はれども、雲霧の下、明にして闇きことなきが如し。

心光の名義

【字義】一。心光とは、大悲の御心は、日光が草木を照し温め、養ひ育て護り導くやうに、私共の心を照し温め養ひ育て護り導きたまふ故、御慈悲のはたらきを心光とのたまふのである。

無明の名義

二。無明とは、暗黑のことで、惡癡、及び其結果として起る疑惑をいふ。

【大意】攝取つて捨てたまはぬ大慈悲の御心の光が、常に私共を照したまふのである。されば已に獲信の一念に疑惑の闇黑はなくなつたれど貪瞋、愛憎、嗔恚、憍慢等の妄念は、雲霧のやうに、常に信心の大空を覆うてゐる。而もちやうど日光が雲霧に覆はれても、其下は全く暗いことはないと同じく、私共の敎はるゝことについては、もう再び以前のやうな眞の暗黑に陷ることはありませぬ。

佛凡不離

【文科】信心の功德の第三として、私共は我心のありさまの如何にかゝはらず、常に御慈悲の御光にまもらるゝことを宣べたまふのである。

一。月夜、舟を湖の上に浮べて南に進めば月も南に進む、北に行けば

月も北に行く。この間天上の月その者は、別に南や北に移るといふことはなくて、而も其影は舟につきそうて移るのである。而して之は一人についてのみではない、別々の人々が皆各々同じやうに、此思をいだくのである。

二。如來の大御心に住むでをる者が、其御光を感ずるについても、亦之に似寄つた趣がある。唯一の如來の御光は私共がいつどこにをるとも暫くも私共を離れたまふことがありませぬ。家に在るとも、野に在るとも、山にあつても、海にあつても、此御光は常に私共につきそひたまふのである。魚は水を離れぬ。人は空氣を避けることはできぬ。如來の子たる私共は、斯御名、斯御光に遠かることができぬ。自ら畏るゝほどの罪惡の我を攝め取つて捨てたまはぬ大悲の大御心、自ら戰くほどの汚濁の我を攝め取つて放したまはぬ大慈の大御光は、たえず私共を照し護りたまふのである。私共は孤獨のさびしさに泣いてはならぬ。一人なりとて徒に罪惡を選うしてはならぬ。御光常に我が上に在ます。今「攝取の心光常に照護したまふ」と仰せられたは此故であります。

三。この厚き心光の照護、是れ即ち私共が信心の確立と相續との唯一の原因である。私共自身の心は、極めて恐かであつて又極めてかよわい。とても自ら眞實の智慧を磨いて、それに安ずることもできねば、又自ら勇猛の大志を揮つて、之によつて進むこともできぬ。永劫の昔より愚痴の無明に覆はれて、疑うてはならぬ如來の大道を疑うて不安の暗路に迷ひ、修めねばならぬ如來の大道を遠ざけて苦惱の小路にさまようたのである。けれども千年の暗も一點の光にて破らる。今や如來の御光に照され、之に養はれ育てられて、私共が永劫以來の無明の暗も直に破り去られて明朗なる佛智の上に我しらず安ずるを得るのである。

殊に此大道に對する疑惑其者をしらべて見れば、これの起るのが早や幾分道に近づいた徵である、而して是れ我力でなくして全く御光の引導の御蔭と思へば、疑惑其者に緣つても、御力を認めねばなら

ぬことになつて、もう私共は疑ひたく思うとも疑ふことができませぬ。而して床の下に萎むで居た草も、日光に會ふ時、いさましく榮えるやうに、かよわい私共も、此如來の御光に護られては、をのづから手強い力を得來つて、純一無二に相續するを得るのである。「無礙光佛の御こゝろのうちにおさめとりたまふゆゑに、金剛の信心とまうすなり」。是において私共は一念における信心の確立と後念における信心の相續と兩つながら滿足することができる。而して其因る所、基く所は、一に如來心光の照護がましますためであります。

「唯信鈔文意」

信後の苦痛

四。けれども一たび攝取の御力を感じて見れば其後は必ずや常に完き安心と歡喜とばかりの起居ができると思うてはなりませぬ。即ち一度信心を獲て後は些しも心の動搖なく苦惱なく、喜びづめに喜び樂みづめに樂むものと定まつてをると思うてはなりませぬ。固より多き同行の中にはさやうな人があるかも知れぬ。けれども皆之に定まつてをるといふことはない。却て多くの人は、信心を受得して後また多くの苦惱を感するのである。時としては獲信以前よりも一層激しい苦痛を感ずるのである。何故かといへば、私共は其受け得た信心によつて我を忘れて御力に憑り正に暗黑の深窖を脫れて全く光明の中の人となつたのであるけれども過去久遠劫來の迷執の餘習はまだ私共に殘つてをるためである。永い間貪りづめに貪り爭ひづめに爭ひ來つた慣習が猶まだ私共の上に消えぬのである。即ち日は既に出でたれど、昨夜からの宿霧が消えはてぬやうに、獲信のとき、已に無明の暗を破れりと雖もその無明の習氣たる貪愛瞋恚の雲霧は常に眞實信心の天を覆ふのである。それ故私共は、信心に入つて後も、入らなかつた前とあまり異ならずに、貪る、吝む、怒る、憎む。隨つて如來の大悲を疎かにする。感謝も、懺悔も、少も起らぬことがある。たとひ此大悲を思ひ出しても少も有難く感せぬことがある。有難く感せぬばかりではない却て此大悲に對して、實に申樣のない不都合の思を起すことがある。而して自ら忽ち此間違つて居たことに氣づく時、全身を通じて一

種異常の震慄を感じ來つて、暗澹たる黑霧が、大空の上より嚴しく我を脈しつけて來るやうな心地になる。此時、我が心の一面は餘りの淺ましさに堪へかねて泣き叫ばうとするが、又一面の心は其底で冷笑してをる。かくて身はだん〳〵深い深い暗黑の窖に落ち行くやうに思ふ。此折の苦痛は、大道の何たるを知らず、罪惡の何たるを辨へなかつた獲信以前の單純な苦痛にまさること幾層倍であるか分らぬ。こゝで餘りの苦しさに、獲信以前宗教以外の氣樂なるを慕うて、いつそ宗教を捨て去らうかとまで思ふやうになる。而して身は、はや遠く如來の大御心に隔つて、遙に光明の宿を離れたのであると悲むやうなことがある。誰でも皆とは申さぬが多くの人は、一度斯類の經驗をすることであらうと思ふ。而して善導大師の『二河白道の譬喩』にある貪愛の水の河、瞋恚の火の河前にあれ狂ひ、別解別行の群賊惡獸後に追り來つて惑亂するがために、「時に當つて惶怖することは正に此寶驗を現されたものである。けれども私共はうろたへては

『二河喩』の實況

ならぬ。この『譬喩』の中の人は、一時いふべからざる惶怖に惱むだけれども渠は、貪瞋のあれ狂ふ水火二河のあなたに、如來の招喚をきいたのである。群賊惡獸の喧しき叫びの外に大聖の奬勵をきいたのである。かくて渠は此奬勵に應じ、此招喚に順つて、後の誘惑にも耳を假さず、左右の妨礙にも心を煩はさず驀直に水火二河の中間に、見えつ隱れつする四五寸の細い白道を進んで、終に彼岸に到つたのである。私共も既に信心を受得して、御慈悲の御宿に在る上は自身が此御宿に在ることをも忘れて、徒に戸外の風雨に胸を痛ますやうなことがあつてはならぬ。速に本心に立返つて、心を靜めて私の上に呼びたまふ如來の御名に心を留めねばならぬ。聞け、「汝たゞ決定して此道をたづねてゆけ、必ず死せむ」との釋尊の發遣は、二千四百年の昔より聞こえてをる。「汝一心正念にして、直に來れ、我能く汝を護らむ、すべて水火の難に墮せむことを畏れざれ」との阿彌陀如來の招喚は、現在唯今、南無阿彌陀佛の御名を以て、私共に宣べ示させられてある。

確固たる自覺

五、この御聲を聞くとき、私共は茲に確固の自覺を得來るのである。煩惱妄念、何物ぞ。單に是れ迷妄如幻のものに過ぎぬではないか。其根本は、はや信念によつて破却せられてをるではないか。して見れば

無根の煩惱

いかに淺ましく煩惱が打騷ぐとも、それが何であるか。單に根なし草の空花ではないか。どれほど烈しく妄念が狂ふとも、それが何であるか。たゞ消え盡した薪の上にさまよふ餘煙ではないか。空花は世界に遍く蔓るとも、そは終に枯れ果つべきものである。餘煙は大千を覆ひ盡くすとも、そは終に消え去るべきものと定まつてをる。必ず枯れ果つべきもの必ず消え去るべきもの、それが何の恐しいことがあらう。

信心の根底

我が享けたる信心が、そのために損はるゝ恐があるといふか。あゝ金剛不壞の御名の顯れたまへる信心、どうして此等の幻のやうなものに損はるゝことがあらう。貪瞋の水火にかくされて僅か四五寸に見ゆる私共の信心の白道、まことは是れ如來本願の成就なされた清淨一實の大道ではないか。淺間の煙はたとひ細々しくとも、其火は深い〳〵

信心の本質

地下の火坑より噴き出てをる。どうして地上の風雨に打消さるゝやうなことがあらう。我信心は無限の大慈悲の噴火である。貪瞋の雲霧に覆はれて何となう、ぼんやりしたやうに感ぜらるゝ私共の信心の天、其本源は是れ永久に雲霧以上に超絶したまふ明朗自在の佛智の大空である。此大慈、此佛智、是れ私共が目あてとすべき唯一のものではないか。唯之に憑る、我に憑らぬ。唯御力をたのむ、たのませてたのまれたまふ御力をたのむ。決して我が憑む心をたのまぬ。我が大悲の如來の命じたまふ一心正念は正しく此謂ではないか。さらば我煩惱妄念の如何は御たすけの前には少しも顧るに及ばぬではないか。まして如來能く我を護たまふ。五劫の御思惟、永劫の御苦勞、一にこの貪愛瞋憎、愚癡迷亂の徒ら者のためではないか。

よく〳〵案しみれば、天におどり地におどるほどに、よろこぶべきことをよろこばぬにて、いよ〳〵往生は一定と思ひたまふべきなり。よろこぶべきこゝろをおさへて、よろこばせざるは煩惱の所爲なり。しかるに佛かれてしろ

しめして、煩惱具足の凡夫とおほせられたるごとなれば、他力の悲願はかくの如きのわれらがためなりけりとしられて、いよ〳〵たのもしくおぼゆるなり。また淨土へいそぎまいりたきこゝろのなくて、いさゝか所勞のこともあれば、死なんずるやらんと、こゝろぼそくおぼゆることも煩惱の所爲なり。久遠劫よりいまゝで流轉せる苦惱の窟里はすてがたく、いまだむまれざる安養の淨土は、こひしからずさふらふこと、よく〳〵煩惱の興盛にさふらふにこそ。なごりおしくおもへども、娑婆の緣つきて、ちからなくしてをはるときに、かの土へはまいるべきなり。いそぎまいりたきこゝろなきものを、こゝとにあはれみたまふなり。これにつけてこそ、いよ〳〵大悲大願はたのもしく往生は決定と存じさふらへ。踊躍歡喜のこゝろもあり、いそぎ淨土へまいりたくさふらはんには、煩惱のなきやらんとあやしくさふらひなまし。

——「歎異鈔」

この懇篤の御旨を覗うて、また何を愛ひ、何を怖るゝことがあらうか。煩惱湧き來るか。このための御慈悲ではないか。安念あれ狂ふか。このための御たすけではないか。恐癡の雲霧晴れては曇つて止まる

處がないか。このための御本願ではないか。嗚呼、私共はもはや逃ぐることができぬのである。逃ぐるものを追かけたまふのが攝取不捨の御旨である。私共は今現に此攝取不捨の御力に捕へられてをるのである。今こゝにては、他の善も要にあらず、此本願の御力にまさる善はない。惡をも恐るゝに足らぬ、此本願の御力をさまたぐるほどの惡はありませぬ。

六。 此自覺私共に湧き來つて今までの烈い苦痛と反對に極めて大なる歡喜の思ひ、私共に流れて參る。この歡喜は、とても獲信以前又は宗教以外に在つては味ふことのできぬ歡喜である。かくて、かやうな苦痛と歡喜とは、一度ならず、二度ならず、幾度も〳〵繰返さるゝか分らぬ。而して此繰返しは、皆是れ如來の私共に降したまへる鍛錬である。この鍛錬の重なる度毎に信念の威德愈多く我が上に現はれ來るを喜んで、私共は勇んで進まねばなりませぬ。

七。 されば、信心を獲て後の有樣は決して喜びづめ、樂みづめと定ま

「御一代聞書」

御光の常照

つたものではありませぬ。「ときく懈怠することあるとき往生すまじきかと疑ひなげくものあるべし」と蓮如上人の自ら申された如く、多くの場合には、苦痛と歡喜と交々起つて參る。さればとて私共は之れによつて、信心を獲て後如來の心光に出入するものであると思うてはならぬ。即ち苦む時は如來の光明を離れたのであつて、樂む時は如來の光明に還つたのであると思うてはならぬ。戸外に遊んで居た幼兒が犬に追はれ、隣の小兒にいぢめられて、家に馳せ歸り母の懷に抱き取られた時、その夢の間は犬を夢み、隣の小兒を夢みて、母の膝下を離れてをると思ひ、さま〳〵の恐や憂に惱むことがあらう。けれども餘りの恐と憂とのために夢さめて見れば、母の乳房は我が前に在る、母の衣は我を包んでをる、母は自分が恐と憂とに惱む間依然として自分を抱いて居つたのである。私共永い間、如來を知り奉らなかつた無明の餘習のため、一たび心光の照護を感じて後も、猶時に過去の迷夢を夢みるのである。夢より夢に落ちゆきて、如來を忘れ如來に遠かるやうに思うて、申樣のない恐怖や心配に苦むのである。されども、夢は、どこまでも夢である。私共凡小の夢は如來眞實の御力を左右するはたらきはない。過去の無明を夢みてをる間も、我は確に光明の御懷に憩へるのである。如來を忘れて、如來に遠かれるを夢みる間も、如來は常に親しく我を照護したまふのである。怖にありと思ふ時、憂に在りと思ふ時、苦と惱とに沈めりと思ふ時、我は獨り底なき暗黑の穴に落ち行くと思ふ時、我は正しく如來の御光にまるめられてをるのである。「彌陀をたのめる人は、南無阿彌陀佛に身をばまるめたることなり」と申されてある。まして此恐と憂とあるがため、如來は一層其攝取の御手を固めたまふのである。之を感じ來れば、私共は一層の歡喜を催さずにをられぬ。殊に私共の機相は之がために愈鍛錬せらるゝものであることを覩じ來れば、どうして此苦惱の中に、深重なる如來の恩寵を認めずにをられやうか。それ故如來の御光の照護には間隙がない、斷間がない、たゞ連續である、永劫より永劫への連續である。譬へば日光は雲霧に覆はる

れども、雲霧の下明かにして暗きことはないと同じやうに私共の夢はいかほど烈しからうとも、之にかゝはらず、如來の御光は未來の際を盡くして、私共の中心に輝きたまふのである。それ故私共の夢さめて、本心にたち戻れば、いつも、之を感じ、之を喜ばずにをられませぬ。

不變の恩寵

八。地上を見れば、高低凹凸定まりがない。山は高く、谷は低い。けれども水は高い山の底にも低い谷の底にも同じやうに通して流れてをる。私共の心は、時々高く如來の大悲を念じて尊嚴の思に躍ることがある。又低く妄情の淤泥に陷りて貪瞋の思に沈むことがある。けれども此高き心と低き心とを整ち見よ。如來大悲の靈泉は、滾々として之を通して流れたまふのである。私共は、一に之に安んじ之に憑りて進まねばなりませぬ。

念々在佛

九。「念々聲々、唯阿彌陀佛に在り」。源信僧都の此御語は私共の深く味ふべき御語であります。

五惡趣六道の名義

(四) 我等永く不退に在り

獲信見敬大慶喜、即横超截五惡趣。

【讀方】信を獲て見て敬ひ大に慶喜すれば、即ち横に、五惡趣を超截す。

【字義】五惡趣とは、天上、人間、地獄、餓鬼、畜生、この五道をいふ。趣といふは道と同じ義である。是等の中には、善惡の別はあるけれども之を佛果、菩薩等五道以上の境界に比ぶれば、共にまだ惡業を全く脱れぬ階段故、皆總べて惡趣といふ。この中、修羅の一を加へて六道といふこともある。今は此一を諸趣の中に分別して、五惡趣といふのである。即ち迷の境である。

【大意】信心を獲て、心に御慈悲をうかべ見て敬虔慶喜の心を得るやうになつたならば、即ち、自力難行の道の如く、迂回でなく、直に横に、迷の境を立ち超えて、大覺の淨土に進む身の上となつたのである。

【文科】信心の功德の四として、横超のはたらきを得ることを宣べたまふ。

謙敬の宗敬

一。如來の大道は、謙讓の宗敬である敬虔の宗敬である、嘲罵と冷笑との文字は其經典に有せぬ所の宗敬である。故に如來の子は、「白眼に

て、他の世上の人を見る者であつてはならぬ。第一如來を敬ふ心に立つて、物を敬ひ、事を敬ひ、人を敬ひ、世を敬ふことを忘れてはなりませぬ。

叡山の山僧

二。昔或僧が道に志して、師を求めた處、偶々叡山の或寺に一人の大徳が居らるゝといふことを聞き、その御方を尋ねて白河の邊より山に登りました。だん〳〵行くと一つの谷川がある。この谷の奥が其大徳の御寺の在る處であるといふことをきいて、樂み〳〵登つて參りまするとふと川上より一莖の菜が流れて來ました、そこで思ふには、一塵一芥皆佛物である、然るに此菜を漫に流すといふのは誤つた了見であるその樣な人を師と仰ぐことはできぬと。力を落して踵を返し、少しく下つて來ますと、忽ち後の方より走り下つて參る一僧がある。何事であるかと尋ぬると、今一本の菜を流したれば、それを拾ひに行くのであると答へました。それを聞いて、前の僧はえらいと感じて、あなたはどういふ御方かと問ひまするとこの奥の寺にをらるゝ御方の弟子であると申した故弟子でさへ此通りであれば、師の聖の德も想ひやらるゝと感じて、また引返して山に入り、その大德について修行せられました。

物に對する敬

三。私は老父より此話を聞いて、古の師を尋ぬる人の眼のつけ處が常並でないことを面白く思ふと共に、又些細の物をも疎末にせぬといふことをたふとく感じました。此事は他の多くの方々の上にも見受けらるゝ事であつて、道如上人は廊下に落ちて居つた紙の一片をも兩手でいたゞかれ、召物なども、足にあたれば、又之をいたゞかれました。峨山禪師は、路傍の木の芽を、むやみにむしることを叱られ、又手水鉢の水をかへる時に、今までの水を徒にすることを誡められ、雨の日に厠の掃除をするには、軒の雨水を以てせられ、その雨水が桶にたまる間は、靜に坐禪してをられたとのことである。一方は中古宗門の組織者として雄大なる經營をなされた上人である。一方は近時禪風の扇揚者として峻嚴の引立をせられた禪師であるちよつと思へば、かやうにこせ〳〵したやうに見ゆる行が、その生涯の上にあらうとは思はれぬ。け

れども泰山は土壌を以て出來てをる。雨師の雄大峻嚴の大行は、實に此細密の用心を其裏面にひかへてをる。而して一班を以て全豹を推せば、紙の片や、衣類や、木の芽や、手洗水や雨水や、僅かの時間やに對してこれ程、大切にせられた此方々は、日常の生活に於いていかに他の凡ての細かな物をも疎にせられなかつたか、といふことは充分に推測することができます。

四。 さて此用心はどこより出て參るか。外ではない、信心の上より湧いて參る。我心、信を獲て、如來の大慈を見る、則ち敬の念をさゝげずにはをられぬ。而して此敬ふべき如來の御光の、何處にも滿ちたまふを觀せずにはをられませぬ。固より天は今まで通りに高く、地は今までのやうに低い。天地萬象の相には、少しの變があるのではないけれども、今は、これまでに感じなかつた尊い御光を、その上に仰ぐやうになつて、一一の物が我に對して、旨がある、價がある、恩がある。それもぼんやりではない、何となくではない。明に凡ての物が自分に向つて、高上

の佛智を教へてをる。又凡ての物が、自分を淨土に向はしむるために力を協せてをる。實に『華嚴經』の御語のやうに、一一の塵中に、如來は道場を建てゝ、其上に尊い御はたらきを現はしたまふのである。されば凡て如來の御物ならぬものはない。蓮如上人は「佛法領のもの」と宣ふ。即ち皆是れ如來光明の王國のものである。私共は今此佛法領にをるのである。此王國の國民である。先賢の申されたやうに、たとひ乾坤の外に足を下すの地はあるとも、身を佛恩の外に安ずべき地はない。仰ぐも佛恩、俯くも佛恩、佛恩に包まれ、佛恩を踏み、佛恩に導かる。萬象皆御光を浴びて、不思議の妙德皆其中に浸みてをる。之を觀ずれば、自ら一莖の草にも、一片の紙にも恭敬の心を起さずにはをられぬのであります。

五。 物に對する敬と共に、私共は又事に對する敬を感じます。固より事には其本たる精神によつて、善惡もあり正邪もある。けれども其相はいづれにもせよ、皆私共に對して、同一の向上の御教を示してをる。

即ち如來の大御心のやはり此上に動かせられてあるのを拜する。それ故、此點において、凡ての事が皆尊い。この尊い教に順うて私共いさみ勵んで、如來の御淨土に進み行く時、其途は常に一樣ではない。時には高い山を越ゆることもある。時には低い谿に下ることもある。野にも出づれば川をも渡る。けれども此等が皆自分を淨土に近かしむる大切な道である。自分は艱難の山を越ゆる時も、一歩づゝ御國に近づくのである。失望の谿に下る時も一歩づゝ御膝元に近づくのである。安樂の野でも得意の渡でも、つねに私を大覺の御位に導くのである。故に毀譽得喪、苦樂榮辱、皆私にはたふとい。それ故、どのやうな境遇にも安んじ、其處に聖旨を享け其上に大命を感じては何事も小言なく勤むる。古人の如く水一口呑むも御用と思ふ。一日の行持皆報謝の正行である。それ故一切の我がつとめ皆同一神聖の大行である。されば私共は、ソクラテスが、日々市に出ては若い者を相手にして倦まなかつたこと、顏回が陋巷に安んじて小言をいはなかつたこと、スピノザが鏡磨をしてをつて不平をこぼさなかつたこと、ペスタロッチーが喜んで哀れな小兒の世話をしてをつたこと、達磨大士が九年の間嵩山に隱れてをられたこと、古の大德が常に便所の掃除をせられて、つひに今日に其雪隱の名を遺されたほどの德行を示されたこと、恐多けれど親鸞聖人が、廿年の餘も片田舍の稻田に無學の翁媼兒女の友となつてをられたこと、而して大聖釋尊が一の乞食沙門となつて、五十年の間村より村へ都より都へと、漂泊の生涯をなされたこと、是等の行の旨を體氣なから會得することができる。是において些ながらでも滿足より滿足への生活を營むことができます。滿足は卑屈の本といふか。何たる迷ぞ。最も成績の良い學生は自分の學校に滿足してをる者であることを見よ。ナイルの河は、滿つればこそ、四方の田野を豐にする。たゞの滿足でさへ、かやうである。まして無限大悲の御力に憑れる滿足が、どうして卑屈退墮の本になることができやう。古聖先賢の生涯が皆之を證明してをらるゝ。「一日作さゞれば一日食はず」百丈禪師の言